
カードキャプターさくら番外編0 さくらとまろんの遊園地

工藤太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードキャプターさくら番外編0 さくらとまるんの遊園地

【Nコード】

N6641U

【作者名】

工藤太一

【あらすじ】

カードキャプターの木之本 桜と神風怪盗ジャンヌこと日下部 まろんはそれぞれ友達と遊園地で遊んでいるとき、魔界から悪魔が舞い降りて混乱に陥ってしまいました。

彼女達はそれぞれの場所で悪魔と戦います。

”神風怪盗ジャンヌ”と”カードキャプターさくら”の冒険が幕を開けます。

パート1（前書き）

”^{かみかぜかいとう}神風怪盗ジャンヌ”の40話^わと41話^わの間^{あいだ}、”カードキャプターさくら”67話^わと68話^わの間のストーリーです。久しぶりのシリーズです。

パート1

●魔界

魔王が作った遊園地の真ん中にある人間界の王宮を模して作られた宿泊施設。

そこで一夜を過ごしたフィンと魔王は、翌日も同じ場所に留まっていました。

「…あの、聞いても良いですか？」

「何だい？」

フィンが魔王に問いかけたのは、昼食の席。

給仕をしていた侍女を魔王の合図で下がった後のことでした。

「私たちは何時までこうしているのでしょうか？」

「私がここに居るのに飽きるまで…かな」

「良いんでしょうか」

「何かな？」

「地上では我らの仲間が臨戦態勢にあると言うのに」

「臨戦態勢か。…見てみるかい？」

「え？」

「人間界の様子をさ」

魔王はそう言うと、目の前の空間に遙か人間界の映像を投影して見せました。

「フィンが心配せずとも、皆それぞれ羽根を伸ばしているようだね」

「あの娘たち……」

遊園地で遊んでいる人間に化けた堕天使の仲間達を見て、小さく溜息をついたフィン。とは言え、それを言える立場でも無いとも判つてはいます。

「もつとも、ただ羽根を伸ばしている訳でも無いらしい」
「え!？」

映像が代わり、遊園地の建物の中にいるフィンの仲間達の姿が浮かび上がりました。それに続いて、遊園地の中にいる日下部まろんと東大寺都の姿も。

「成る程。これは、レイ達の作戦なのでしょう」

「天使達の?」
「願いがあり、私が行動の許可を出しました。神の御子の力を計りたいと」

「天使は働き者だな。上司の留守も仕事を休まない」

呆れたという表情を魔王は浮かべます。

「与えられた生命の長さが魔族と違いすぎるのです。一時でも無駄な時間は」

真剣な目で魔王を見据えつつ、フィンは言いました。

「そうであつたな。では、時間は有効に過ごすことにしよう」
「え?」

「今後の作戦について、話をしに来たのだろう?」
「はい。しかし」

周辺は偽りの光とは言え陽光に溢れていて、出来損ないとは言え小鳥の囀り。

戦の話をするような場所とは思えませんでした。

「実は、時を待っている」

フィンの心を見透かしたように、魔王は言いました。

「え？」

「直に判る」

そう言うつと、魔王は手を叩いて侍女を呼び、お茶のお代わりを所望しました。

●水無月ギヤラクシーワールド・ショッピングモール

作戦の前の僅かな時間を遊園地で過ごすことにした人間に成りすました墮天使のレイとミナ。

二人がまず最初に向かったのは遊園地に点在する鋼鉄で出来た乗り物…では無く、『銀河亭』と看板の掛かったレストランでした。

「デザートが欲しいわね」

そうミナが呟いたのは、食後のコーヒーを飲んでいた時のこと。二人が頼んだランチセットには、デザートがついていなかったのです。

贅沢に関する話となるとうるさいレイも、この時は何も言いませんでした。

「あれなんかどうだ？」

それどころか、自らアイスクリーム屋を指さしてすらいいます。

「いらつしやいませ」

アイスクリーム屋には自分たちと（外見上が）同じ年頃の店員が二人いました。

アルバイトらしい店員は、一人は眼鏡をかけた優しそうな表情をもう一人は鋭い視線をそれぞれ二人に向けました。

鋭い視線を向けられ、一瞬緊張したレイ。しかし、その店員も直ぐに隣の少年と同じような微笑みを浮かべたので、緊張を解きました。

「うーん……」

たくさん種類があるアイスクリームを前に、どれにしたものかと悩むレイとミナ。そもそも、アイスクリームに関する知識が足りないのです。

その間、目つきの鋭い店員が何故かレイとミナを睨んでいましたが、真剣に品定めをしていた二人はそれには気づきませんでした。

「あの……」

二人が品定めを初めて数分が経過した時、眼鏡の店員が声をかけて来ました。

「本日のお勧めは、この胡麻と宇治金時と……」

「ふんふん」

「じゃ、これとこれ」

店員に勧められるまま、アイスクリームをそれぞれ二段重ねで注文したレイとミナは、支払いを済ませると早速アイスを舐めつつ、遊園地の中心へと歩いて行くのでした。

● 水無月ギヤラクシーワールド・中心部

「ちよつと疲れた。休憩しよ、まるん」

ロケットコースター「マルス」から降りて来たまるんと都。
この日二つ目のジェットコースター体験に、都は少々疲れた表情を浮かべていました。

「大丈夫？ 都」

奇跡的に空いていたベンチを確保したまるんと都。

「こんなのちよつと休憩すれば大丈夫よ」

「もうちよつと大人しい乗り物にしようよ」

「それは却下」

「どうして？」

「まるん、こう言うの好きでしょ」

「まあ、それは……」

「コースターに乗ってる時のまるんの表情、なかなか良かったよ」

そう言うと、都はバックの中から一枚の写真を取り出しました。それは、コースターに据え付けられたカメラで撮影されたもので、悲鳴を上げている都の隣で、まるんは確かに嬉しそうでした。

「都、そんなの買ってたの？」

「うん」

「恥ずかしいなあ、もう」

「なら、ジェットコースターの写真にVサイン出して写るんじゃないわよ」

「何か、光っているのが見えたから、つい…」

「これは、私が一生宝物にして保管してあげるから」
「え」

写真を奪おうとしたまろんの手をかい潜り、都はその写真を再びバッグにしまっていました。

「ねえ、都。喉乾かない？」

「んー。それより、アイスか何か食べたい」

「あ、それも良いわね。じゃあ私、買って来るよ」

「それならあたしが」

「良いから、都は休んでて」

そう言い、まろんは立ち上がりました。

都が無理に止めようとしなかったのは、きっと本当に疲れていたからなのでしょう。

まろんは、昼食時に見つけていたアイスクリーム屋に走って行くとして、その足を止めました。

「…どうしたの？」

「……」

都の呼びかけに応えなかったまろん。
ピンと来て辺りを見回した都。

彼女の予想は半分は当たり、半分は外れました。

「まろん！」

「あ……」

「可愛い子に見とれてないで、とつとと走る！」

「はあい」

固まってしまったまろんの視線の先。

そこには、金髪と黒髪の美少女が、腕を組んで歩いていました。都に急かされ、ショッピングモールの方に走って行くまろんは、名残惜しそうに二人の方をちらちらと見ていました。

*

“おい、今の”

“ええ。気づいてる。御子ね。でも、まだ時間じゃない。無視しましょ”

“でも、あいつはこちらを見ているようだが”

“御子は可愛い女の子が好きだから”

“喜ぶべきだろうか”

“それで良いんじゃない？”

遊園地の中で腕を組み、アイスクリームを舐めながら歩いていたレイとミナ。

二人は視線を動かすことなく、心の声で会話をしていました。

カップルのように腕を組み歩いていた二人を見て、女だけだと見て取った身の程知らずの男達——本人達はそうは思っていない——が何人か声をかけて来ましたが、二人は彼らに無視で応えます。この日の招待客はどちらかと言うと金と女性に不自由を感じない

層が多かったので、大半はそれで諦めて去って行ったのですが、例外はどこにでもあります。

「おい、無視すんなよ」

無視されたことでプライドでも傷ついたのか、レイの肩に手を置いた男は、その直後にミナに腕を掴まれ、睨まれるとそれまでの威勢は何処へやら、逃げ去ってしまうのでした。

「全く、これで何人目かしら」

“ 6 組目、だな ”

ミナのぼやきに対してレイは即座に心の声を触れた肌越しに返しました。

“ 数えていたの！？ 呆れた ”

“ ここは戦場だぞ。それ位は当然だ ”

“ まだ、ここでは戦いは始まっていないのに ”

“ 日が暮ればそうなる ”

「はいはい」

最後は口に出して、ミナが言いました。

それを議論の終了と受け取ったレイもそれ以上は何も言いません。

「とにかく、時間のあるうちは楽しもう？」

「ああ」

腕に手を回したまま、レイに寄り添う形となったミナ。

レイはそれを受け入れていましたが、突然ミナを突き放しました。

「何!？」

レイに乱暴に扱われたことで、ミナが不満の声を上げることはありません。

彼女がその様な態度を取る時は、必ず何か異変があつた時。

そう感じたミナは警戒の視線を周囲に走らせ、すぐに警戒を解きました。

“あの子たちったら…”

“全く、隠密行動中なのだぞ”

そつ心の声で会話はしたものの二人はその場を無言で立ち去りました。

直立不動で立っている、数組の男女に見守られながら。

●水無月ギヤラクシーワールド・ジェットコースター『ユピテル』

「手始めに、ここから行こうか」

「そうね」

まろん達と別れた後、各所に配された絶叫マシンとそれに乗り悲鳴を上げている人間達を興味深げに眺めつつ、遊園地の奥へ奥へと歩いて来た墮天使のエリス達。

その視界に海が潮の香りとともに広がり、これ以上奥は無いと判りました。

そんな彼女達の目の前に建っていたのは、巨大な木で出来た構造物。

その構造物の上を中を他のものと同じ様な形をした乗り物が、他の同種の乗り物とは明らかに違った轟音を立てて走り回っていました

た。

その轟音をエリスはいたく気に入ったのですが、もちろんそれを口に出して言うことはありません。

「僕はローラーコースターなど乗りませんぞ」

乗り場には短いながらも出来ていた行列。

そこに並ぼうとした堕天使・アンの背中に向け、堕天使・トールンは主張しました。

「え？ どうして？」

「あんな子供じみた乗り物などに…僕は乗りませんぞ」

「私も子供じゃ無いけど？」

「それは…」

「トールン、まさか…。ローラーコースターが怖いんだろ」

「馬鹿な！ この龍族一の猛将、トールンが…」

「『皆殺しのトールン』が良く言っぜ」

「貴様…何故それを……」

「エリス！ 言い過ぎよ！」

二人の喧嘩をまたかという表情で見つめていたアン。

しかし、エリスがその言葉を発した瞬間に、大音声でエリスを叱りました。

その声は、周囲の人々全てがエリス達を注目する程のもので、こうなってはエリスもそれ以上喧嘩を続けることは出来ません。

「エリス。トールンに謝りなさい」

先程よりは幾分抑えた声で、アンは言いました。

「何で俺が…」

「貴方の言葉はトールンに対する侮辱。トールンに対する侮辱は私に対する侮辱。」

そして…」

「ああ、判った。判ったから…。すまなかったな。トールン」

不承不承という感じは明らかでしたが、とにかくエリスは謝りました。

「フン。まあ、良かろう」

「それとトールン」

「はい。姫」

「トールンも一緒に乗ってくれるわよね」

「それは…」

「正直なところ、私も少し怖い。だから…」

「姫がそう仰るのなら」

「ありがとう」

こうして、ジェットコースターに並ぶことになったエリス達。

それから暫くして、木製のコースの中から遊園地中に響く大音声が響き渡り、遊園地で遊ぶ人々を驚かせるのでした。

パート1（後書き）

次回はさくらちゃんと知世ちゃんが登場します。久しぶりの小説です。

”カードキャプターさくら”のラストの一部は書き換えておきます。

パート2（前書き）

今回はさくらちゃん達が登場します。
あまり上手ではありませんが、頑張ります。

パート2

●水無月ギヤラクシーワールド：ショッピングモール

遊園地の中に入っても、知世は走るのを止めませんでした。

背後から、「待って下さい」との声が微かに聞こえましたが、無視します。

「ねえ知世ちゃん。何で走るの？」

「急がないと、乗り物に乗れませんわ」

そう言い、人混みをかき分けるように駆けて行く知世達。しかし、さくらが急に「待って」と叫び、知世は足を止めました。

「さくらちゃん？」

「あれ、雪兔さん」

「まあ…」

アイスクリーム屋の前で、アイス舐めている少年は、紛れもなく雪兔でした。

「雪兔さん」

さくらが声をかけると少年もこちらを見て笑顔を見せ手を振りました。

「さくらちゃん。それに知世ちゃん」

「雪兔さんもこの遊園地に来てたんですか？」

雪兎の前に立ち、さくらは尋ねました。

「うん。桃矢とバイトでね」

「あ、売り物食べて大丈夫なんですか？」

「大丈夫。これはお金を払って買ったから」

「おい、雪。店番戻れよ」

店の中から、桃矢がひょっこり顔を出しました。

毎度のことながら、どうして行く先々でお兄ちゃんは、バイトをしているんだろうとさくらは思います。

もう少し考えれば真実に辿り着きそうですが、これまでと同様、それ以上さくらは深く考えることはありませんでした。

「お兄ちゃん」

「何だ怪獣。来てたのか」

「怪獣言っな〜！」

「ああっ。兄妹喧嘩をなさるさくらちゃんも猛烈可愛いですわ〜」

「そんな所までビデオに撮らないで〜」

ビデオでさくらと桃矢の様子を撮影していた知世。

ちらりと視線を後ろに走らせると、先程の御曹司が追いついて来ていました。

「それじゃ、私達はこれで失礼しますわ」

「おう」

「楽しんで来てね」

「知世ちゃん、そんなに強く引つ張らないで〜」

●水無月ギヤラクシーワールド：ジェットコースター『ユピテル』

付近

暫く走り続けて、漸く御曹司の追跡をかわした知世。走るのを止め、取りあえず何らかのアトラクションに乗ろうと思います。

「さくらちゃん。まずは何に乗りましょうか？」

「そうだね。あれにしようよ！」

さくらはコースが白く塗られたジェットコースターを指さします。

「ジェットコースター『ユピテル』やな」

さくらの肩に乗るケロちゃんがリーフレットを手にして言いました。

「木製だから『ユピテル』なんて、安直ですわね！」

「何で？」

「ユピテルはラテン語で『木星』の意味ですわ。さくらちゃん」

「ラテン語を知っているなんて、知世ちゃん凄い」

お父さんの書庫の掃除を手伝った時に教えて貰ったので、ラテン語という言葉があること位はさくらは知っているのでした。

「それに、それだけではありませんのよ」

「何？」

「木製のジェットコースターは、あれより以前にも幾つかあったんですけど、初めてのジェットコースターは何て名前だったでしょう」

「ひょっとして、『ジュピター』？」

再放送で観たアニメ番組に登場する、雷を放つ美少女戦士の姿を思い浮かべながらさくらは答えました。

「正解！誰が考えたか知らないけど、名前の付け方が安直過ぎますわ。この急流下りのメルクリウスも……あら？」

知世のことを二人の少女が見ていました。

その内の一人、栗色の髪をした少女と目が合います。

一瞬の後、それが会おう会おうと思っていた日下部まろんだということに知世は気付きます。

「わあっ。まさかこんな所で会えるなんて！」

さくらも気付いたのでしょう。

知世が声をかける前に、さくらが声を上げました。

「本当ですわ、さくらちゃん」

「え？ え？」

まろんは、戸惑っている様子でした。

実は先日怪盗シンドバッドこと名古屋稚空に携帯電話を取り上げられてしまって長いこと連絡していなかったのです。

「まろんさん。都さんも。」

「知世ちゃん。」

「それにさくらちゃんも。」

「お久しぶりです。」

「暫くね。連絡がでなくてどうしようかと思ってたの……。」

「何よ？連絡って……。」

3人の会話を都が割り込みました。まろんはどう説明したら良い

のか判らなくなつて口籠つてしまいました。その時、聞き覚えのある声がしました。

「あれ？ 日下部さんと東大寺さん！？」

振り返ると、水無月グループの御曹司が立っていました。どうやら、御曹司はまるんの知り合いだったようです。

「ちっ」

思わず、知世は舌打ちしてしまいました。

「それでは、まるんさん。急ぎますのでこれで失礼します」

「あ、はい。どうも…」

まるんの返事を皆まで聞かず、知世はさくらの手を引いて走り出すのでした。

●水無月ギヤラクシーワールド：中心部

「中々楽しいことになっているね」

行き交う人々を眺めながら、エリオルは呟きました。この地の中には、人外の者の気配に満ちていました。悪魔、龍族、天使…。そして人間だった者の魔の気配。クロウの記憶を持つエリオルは、クロウであれば感じる事が出来たように、それらの気配の正体を即座に見破っていました。

「どうするの？」

奈久留が声をかけました。

「これから何が起こるのか、もう少し様子を見てみよう。だが、彼女達が気付くのは面白くないな」

「何をするつもりですか？」

エリオルの肩に乗るスピネルが尋ねます。

「何時もやっていることだよ。魔物の気配を消す。クロウの気配を消す時のように完全には行かないだろうが、薄めることは出来る」
「では、もう少し目立たない場所へ」

スピネルが言い、歩き出したエリオル。
だが、その足が止まります。

「ほう。懐かしい男がいるな」

彼の視線の先には、一人の青年が立ちこちらを見ていました。
しかし、直ぐに視線をそらすと、歩き去ってしまうのでした。

● 水無月ギヤラクシーワールド：ジェットコースター『ユピテル』

「こちらですわ。さくらちゃん」

「これが『ユピテル』なんだ。凄い」

「ネーミングセンスはありませんけど、コースレイアウトはまあまあですわね」

まろん達に捕まっているでしょう。

御曹司はそれ以上追いかけては来ず、どうやら無事にジエットコ
ースター『ユピテル』の前に辿り着いた知世達。

その入り口の前に、知世にとつての妖精が現れました。

「あら、あなた大道寺知世さん？」

知世が挨拶する前にその妖精——山茶花弥白——が声をかけまし
た。

「え…。あ！ こんにちは。弥白さん」

弥白に見とれていた知世は、慌てて挨拶をしました。

「お母様はお元気？」

「はい。母も来たかったそうですが、仕事の都合で」

「こちらの方は友達？」

「はい。同級生の木之本桜さんですわ」

「こつ、こんにちは」

「こんにちは」

緊張した表情で、さくらは弥白に挨拶しました。

弥白は黒い服を着て盲導犬を連れた金髪の女性と一緒に、その横
にいる眼鏡の女性、そして少年と一緒に、視覚障害者であろう金髪
の女性を案内しているのだと思われました。

「（私も弥白お姉様を少しは見習って、ボランティアでもしよう
かしら）」

そんな殊勝なことを知世は考えたりもしたのですが。

「待って下さい」
「あら」

遠くの方から、さくらとの時間をぶちこわす疫病神の声が微かに響きました。

「水無月さん」
「え？大和さん？」

黒服の女性も声を聞きつけたのでしょうか。
疫病神の名を呟きました。

「しつこいですわね」

聞かれないよう小さな声で、知世は呟きます。

「弥白さん。それでは、私たちは先を急ぎますので。ごきげんよう」
「う」

「あ…。ごきげんよう」
「行きますわよ。さくらちゃん」
「あ、ちよつと知世ちゃん」

呆気にとられている様子の弥白を置き去りに、知世はさくらの手を引いて再び逃げ出そうとしました。

「ねえ、大道寺知世さんって言ったわよね」
「はい。あの…」

視覚障害者とは思えない程の素早さで、黒服の少女が知世の前に

立ちはだかったのは、その時です。

ぶつかりそうになり、慌てて知世は急停止します。

その所為で、さくらが背中につつかってしまい、声を上げました。

「あの男性から逃げ回っているのかしら」

「それは…」

「あの方、私の知り合いなの。決して悪い人じゃないわ。出来れば、どうして逃げ回っているのか教えてくれないかしら」

笑顔を見せつつも、逃げを許さない口調で黒服の女性は言いました。

「そうなの？ 知世さん」

「……」

黒服の女性の話を聞いて、弥白も知世に問いかけて来て、どう答えたものか知世は迷います。

「山茶花さーん。瀬川さーん」

そうしている内、水無月グループの御曹司——水無月大和だと今、名前が判明しました——が追いついて来ました。

「はあはあはあ。やっと追いつきました」

「私はさくらちゃんと三…二人でここに遊びに来たんですの。案内は不要ですわ」

漸くといった感じで追いついた大和に対し、突き放すように言いました。

「そんなあ」

困惑した様子で大和が言いました。

大和には大和の事情があるのは何となく判りますが、こちらにもこちらの事情があるのです。

「駄目よ、知世さん。大和さん、困ってるじゃない」

すると弥白が、諭すように知世に言いました。

「気持ちは判るけど、貴方は我が儘ばかり言える立場じゃないの。判るでしょ」

「判りましたわ」

それまでの態度を百八十度変え、知世は答えました。
何と言っても弥白は知世の憧れのお姉様。
彼女の言う事は絶対なのでした。

「水無月大和さん」

「はい。」

「水無月さんもお仕事ですから、ついて来ても良いですけど……」

「ありがとうございます」

「案内は不要ですから」

がながんと心の中で五寸釘を知世は打ち付けていました。

「判ってます」

「それでは参りましょう。さくらちゃん」

「うん」

「それでは、弥白さん。ごきげんよう」

「ごきげんよう。大和さんもね」

「あ、はい。失礼します」

大和を置き去りにするのは諦めたものの、知世は彼が居ないが如く振る舞うことに決めました。

一方さくらはと言うと、大和の方が気になるらしくちらちらと振り返って見えています。

「あの…」

「何ですの」

「そのビデオカメラなんですけど」

「私のですけれど？」

「良かったら、僕が撮りましょうか？ お友達とツーショットで」

大和はにこやかな笑顔を見せて言いました。

「駄目ですわ」

「え？ でも、それだと大道寺さんは映らないんじゃない？」

「だって、さくらちゃんの美しい姿を本当に美しく撮影するのを他の方にお任せ出来ませんもの！」

ツーショットには心惹かれましたが、さくらちゃんの撮影を素人にさせる訳にも行きません。

「と、知世ちゃん……」

「は、はあ…」

「さ、さくらちゃん。先に行って下さいな。私は後から撮影しますから」

「う、うん…」

さくらを先に歩かせて、撮影を続ける知世なのでした。

●水無月ギャラクシーワールド：ジェットコースター『マルス』

当初木製コースター『ユピテル』に乗りうつとしていた知世達。

しかし弥白達の前からあのような形で立ち去った以上戻る訳にも行かず、結局向かった先は遊園地の中心部にあり、そそり立つロケット（レプリカですが）が一際目立つジェットコースター『マルス』でした。

「さくら、さくら」

その途中、ケロちゃんがさくらに小声で話しかけました。

「何？ ケロちゃん」

大和に気付かれぬよう、さくらも小声で答えます。

「何か妙な気配がするんや」

「ケロウさんの気配？」

「違う。何か、それとは別の…そう、あれはフィンの気配や」

「フィンちゃん？」

さくらは顔をしかめます。

「フィンは確か正天使になるために天界に帰ったのはしつとるやろっ。」

「あ？」

さくらは小さく肯きます。

「まるん姉ちゃんが集めたチエス駒は神様がもつとるさかいフィンは立派な正天使になって戻ってくるで。」

「なら、良いけど…」

そう言いつつも、さくらはちょっと不安そうな表情を見せました。

「それに、別の匂いもする」

「何？」

「何か蜜柑のような香りが…」

「蜜柑？」

さくらはくんくんと鼻を鳴らします。

すると本当に蜜柑のような香りがして来ました。

「さくらちゃん」

「ほえ？」

「ここは場所が悪いようですね。戻りましょう」

「え!？」

さくらが見るところ、『マルス』の入り口に客が並んでいる気配はありません。

しかしその一方で、コースターが動いている気配もありません。だから多分、コースターが故障か何かしているのだろう。

そう思い、さくらと知世、そして大和は元来た道を引き返すのでした。

●水無月ギヤラクシーワールド・大観覧車

「（もう、時間がありませんわ…。仕方ありませんわね）」

腕時計をちらりと眺めた知世。

いつの間にか時間は、午後五時半を回っていました。

小狼との約束を考えると、さくらとの二人きり（ケロちゃんと大和もいますが）の時間はあと僅かしがありません。

「さくらちゃん。観覧車に乗りませんか？」

「ほええ。大きい観覧車だねえ」

「日本最大の観覧車なんですよ」

後ろから大和が解説しますが、知世は聞き流します。

「水無月さん」

「はい」

知世からの呼びかけに、期待を込めた表情で大和は応えます。

「観覧車にさくらちゃんと二人で乗って来ますから、水無月さんは下で待っていて下さいますか？」

「はい！ え…？」

元気良く答え、直後にみるみる暗い表情となった大和。その表情を見て、知世はくすりと笑います。

「さ、参りましょう。さくらちゃん」

「うん…」

さくらは、大和の方をちらちらと見ながらも、それでも知世と一緒に来るのでした。

●大観覧車：ゴンドラの中

大和を地上に残し、ゆっくりと大観覧車のゴンドラは上昇して行きました。

太陽は既に傾き、遊園地を夕陽の赤い光が照らしています。

6人は乗れるはずのゴンドラ（この大観覧車ではキャビンと称しています）には、今はさくらと知世の二人きり。

「ぶはー。あー疲れた」

……二人ではありませんでした。

ケロちゃんの声が出て、知世の表情が微妙に変化します。

一方、さくらの表情は明るくなりました。

「ケロちゃん。お疲れ様」

「まあ慣れとるさかい、どうってことないけどな」

仕方無く知世は、ビデオカメラで、さくらとケロちゃんの話している様子を撮影を始めました。

「知世ちゃん」

「何ですか？」

「あの、水無月さんって人も一所に乗って貰えば良かったのに」

さくらちゃんと二人っきりになりたいと言う私の想いが判らないのかしら。

そう、心の中で呟いた知世。しかし、何時ものようにその想いを口に出すことはありません。

そう、あの時と同じように。

● 一昨年：友枝小学校校庭

「でも、知世ちゃんのお母さんって、うちのお母さんのこと好きだったんだね」

その日は友枝小学校の運動会。

園美と藤隆が話している様子を見て、さくらは言いました。

「わたしもさくらちゃんが大好きですわ」

「わたしも」

無邪気に、さくらも答えます。

「そろそろ閉会式らしいぞ」

「はい」

呼びかけられ、走り出したさくら。

その背中に向け、知世はこう心の中で呟きます。

「きっと、さくらちゃんとは違う意味の『好き』ですけど」

● 現在：大観覧車

「（いつかはさくらちゃんにも、私の気持ちを気付いて頂けるの

かしら」

本当に小さく、知世はため息をつきました。

「（でも、あんな男にも優しいのがさくらちゃんの良いところ何ですけど）」

そう思い、頬を緩めた知世。ですが急に思い出したことがあります。

「忘れていましたわ！」

「どうしたの？」

「何や!？」

鞆から知世は携帯電話を取り出します。

「やっぱり…」

着信履歴を見ると、ボディーガードから電話が来ていました。

さくらとのデートを邪魔されないよう、マナーモードにしていたのですが、その後で携帯を確認するのを忘れていたのです。

自分の迂闊さを呪った知世。しかし、小狼との約束の時間までに着替えさせれば良いか
と思い直します。

「さくらちゃんのお洋服、遊園地の正門前に届いているそうですわ」

留守番電話に入れられていた伝言を聞き、知世はそう答えました。

「そ、そう…」

さくらは複雑な笑顔を見せました。

「ですから、この次は正門に参りましょう」

時間も丁度良い感じですね。

心の中で知世は呟きます。

「正門言ったら随分遠いな」

「ケロちゃんが歩く訳じゃ無いじゃない」

「でも、遊ぶ時間が減るやないか」

「私は制服でも良いんだけど」

「そういう訳には参りませんわ！ 今日大切なさくらちゃんのデートの日。こんな大切な日には、それなりの服を着なければ」

「デート？ 私が？ 誰と？」

不思議そうな顔で、さくらは知世を見つめます。

ここで小狼との約束を話せば、さくらは赤面しつつも納得してくれるでしょう。

しかし、それではサプライズ効果が薄れてしまいます。

「（こうなったら…）」

どさくさ紛れに告白ですわ。

お母様にも出来なかった告白を。

「もちろん…」

その続きの台詞を知世は言う事が出来ませんでした。

「何や!?!」

「知世ちゃん、あれ!」

さくらが指さした先を知世は見ました。

「怪盗ジャンヌ!?!」

「うん!ジャンヌだよ!?!」

ジャンヌは一端着地し、再び跳躍すると今度は大観覧車の目の前を通り過ぎて行き、海面に突き出たジェットコースター『ネプトゥヌス』の方へと飛んで行きました。

「まさかジャンヌが・・・。」

「ジャンヌはそんなことはしないよ。知世ちゃん。」

「言われてみれば・・・。」

「おい、さくら!?!」

ケロちゃんが警告の声を発します。

「ああっ!?!」

「大変!」

ジャンヌが跳んでいった先のジェットコースターで光が一閃、コースが崩落して行きました。続いて、乗客達のものであるう悲鳴が響き、コースターが海に落下し、かけて途中で止まりました。

しかしそれは遠くから見ても奇跡としか思えない止まり方で、何時海に落ちるとも判りません。

「助けなくちゃ」

「カードキャプターさくら、出勤やな！」

「うん！」

さくらが返事をした時、ゴンドラの灯りが消えました。

「停電！？」

「そうみたいですわ」

大観覧車だけで無く、遊園地内部の灯りも消えていました。

「急がなくちゃ！」

さくらは鍵を取り出し、星の魔法陣の元で呪文を唱えます。

「星の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ！ 封印解除！！」^{リリース}

「（ああっ。バトルコスチュームを着て頂くことが出来ないのが残念ですわ）」

封印を解除するさくらの姿をカメラに納めつつ、知世は心の中で残念がっていました。

「剣（SWORD）！！」

杖を縦に掲げ、さくらはカードを上投げました。

杖は剣に変化し、さくらはその剣で鍵がかけられている扉を強引に開けました。

開いた扉からはそれ程強くはありませんが風が吹き込み、知世の髪をなびかせます。

「翔（FLY）！！」

今度はさくらの背中から翼が生えました。

それはゴンドラの中を埋め尽くす程の大きさで、知世の視界が白一色に染まります。

「さくらちゃん！」

「危ないから知世ちゃんは、ここで待ってて！！」

危険でもさくらちゃんの側にいたい。

そう言いたい知世ですが、知世の視界が再び開けた時、さくらは本来の姿を取り戻したケルベロスと共に急速に暗闇へと染まりつつある空へと飛び出しているのです。

パート2（後書き）

怪盗ジャンヌが町で大暴れ！？

彼女は美術品に潜む悪魔をやつつけるために怪盗をしています。そんなことするなんて有り得ません。

これは偽者です。

ちよつとでも良いから調べた方が良さそうです。

パート3（前書き）

まろんちゃん達は身動きが取れなくなって大ピンチです。
この先彼女達はどのようなのでしょうか。
今回は稚空くんは出番は殆どなしですね。

パート3

レールが無くなったため、車両は海面に向け真っ逆さまに転落して行きました。

「キヤアアアア……！！！！！！！！」

すぐに事態に気づいた乗客達は、それまでとは異なる悲鳴を上げました。

しかし乗客達はやがて気づきます。

直ぐに訪れる筈の最後の瞬間が来ないことに。

「あれ？」

それに真っ先に気づいたのは、まろんでした。

「助かった……のかな？」

「何、これ……」

ジェットコースターはコースの頂点から海面に落下する途中で停止していました。

常識で考えればあり得ない状態。コースターは後ろの車両の一部をコース頂点部分のレール上に残し宙づりになっていたのです。

「キヤッ」

後ろからアンの悲鳴がしました。

それとほぼ同時に、ジェットコースターの後ろの方から不気味な音が響くのが聞こえ、それを聞いて乗客達が悲鳴を上げました。

「みんな動くな！ 迂闊に動いたら、コースターは海に落ちてしまうぞ！！」

パニックに陥りかけ、脱出しようとした一部の乗客。

それを制したのはまるん達の二つ後ろに座っていた同行者の1人である黒髪の美少女らしい声でした。

その声で、取りあえず乗客達は落ち着きました。しかし、それで危機が去った訳ではありません。

「まるん……」

不安そうに、隣に座っていた都が話しかけてきました。

「大丈夫、大丈夫だから」

どうしてコースターが海面に落下しないのか。

まるんは既に気づいていました。

「（我ながら、凄い……）」

コースター全体を自分が無意識に作りだした神のバリヤー——障壁が包み込んでいる。

障壁自体は暗がりで良く見えませんが、まるんは確信していました。何の衝撃も無く、コースターそれ自体を止めてしまったのは流石に謎でしたが、それさえも障壁が押さえ込んだのだらう。そのようにまるんは納得することにしました。

「よし。みんな、聞いてくれ。どうしてこうなったのか判らないが、このコースターは奇跡的にコースに引っかかった状態で宙づり

になっている。だから迂闊に動くことは出来ない。だが、すぐに助けが来るはずだから、そのまま動かずに待っているんだ」

後ろの方から、再び先程の声がしました。

「（私が支えている間に、みんなで脱出してくれると助かるんだけど…）」

少女の言う事は正論だと思うものの、コースターと乗客の重みを一人の精神力で支えなければならぬままろんにしてみれば、冗談ではありません。

とは言え、真実のところを明かすわけにもいきませんが。

「君達も聞こえたか？」

「あ…はい！」

呼びかけられ、慌ててまろんは返事をしました。

●水無月ギヤラクシーワールド・大観覧車

「何ですの、これは…」

観覧車のキャビンの窓。窓の外には信じられないものが見えまして。

暗くなった空。

その中を白い衣装を纏った人影が、金髪をなびかせて飛び去って行きました。

「怪盗ジャンヌ？ そんな…！」

信じられない。そんな思いを抱きつつ、弥白はその名を口にしました。

「ジャンヌ？ どうして…」

弥白の言葉を聞き、同行者の1人で障害者の少女・ツグミもその名を口にしました。

「判らない。だけど、あれは確かに怪盗ジャンヌだったわ」

「また、何かあったのかしら」

「とにかく、ジャンヌが居る以上、ここは危険ね。地上に降りたらすぐに避難しないと」

「そうね」

ツグミと話しながら、ジャンヌが飛び去って行った方向を小型双眼鏡で見っていた弥白。

「コースターが！」

「何！？ この悲鳴？」

異変に気づいたのは、二人同時でした。

弥白が見たのは、海面に突き出たジェットコースター『ネプトゥヌス』のコースが海面に向かって落下して行く姿。

そしてツグミが聞いたのは、その時に観客が上げた声でした。

「ジェットコースターが…」

コースから外れた状態で空中に宙づりになっているコースターが、弥白から見えました。

「大変だわ！」

誰か既に通報していると思いつつも、弥白は携帯電話を取り出し消防署に通報しました。

その直後。ガクンとキャビンが揺れ、電気が消えました。

「どうしたの？」

「停電みたい。これもジャンヌの仕業なのかしら」
「違うと思うわ」

即座に否定したツグミ。

それを聞いて、どうしてそう思うのかと言いたくなった弥白。
ですがもちろん、それを口にすることはありません。

「（貴方も、ですのね…）」

ただ、そう思っただけでした。

携帯電話をしまいかけ、弥白は再び端末のボタンを押しました。
今度は音声通話ではありません。

「これで、よし。と…」

「山茶花さん…」

弥白が何をしているのか判らず、やや不安混じりの声をツグミが
かけて来ました。

「大丈夫。あなたは必ず私が守りますわ。…正確には、私たちが、
ですけど」

そう言うと、弥白は上を見上げます。

メールを送信したのは今なので、本当は今は何も見えるはずは無いのですが。

「え…」

急速に黒色に染まりつつある空。

頂点に達していたキャビンの一つの扉が開き、その中から背中から翼を生やした少女が飛び出して来ました。

その後から、黄金色の獣らしきものが空中に出現し、少女と獣が急速に高度を上げ、『ネプトウヌス』へ向け飛んで行くのでした。

●水無月ギャラクシーワールド・ジェットコースター・『ネプトウヌス』

「おい！ コースが！」

「車両が宙づりになっているぞ！」

「早く助けに行かないと」

「消防だ！ レスキュー隊に連絡を」

コースターの異常は直ぐに従業員達も気づき、駅舎では大騒ぎとなっていました。

直ちに救出に向かおうとして、コースターが宙づりになっている状況に気づきます。

とにかくも、従業員が動き出そうとした時です。

この遊園地の警備員が何人か、彼らの前に現れました。

「どうしました？」

従業員達が状況をあわただしく説明すると、自分たちが取りあえず救出に向かうと告げ、啞然としている従業員を尻目に事故を起こしたコースターの方へとメンテナンズ用の通路を伝って進み始めました。

その中には女性も一人含まれていて、従業員達を驚かせていました。

●水無月ギヤラクシーワールド・ジェットコースター・『マルス』

遊園地の中心部近くに位置する、火星の名を冠するジェットコースター。

そのコースの中心部にどんと立つロシア製ロケットのレプリカ。その頂点にエリスは立っていました。

「始まったか」

怪盗ジャンヌ——実際には、ミナが変装した姿ですが——が大観覧車の側を跳躍して行ったのを目撃し、エリスは眩きました。

始まったとは言え、ここでエリスがすべき役目は変わりません。ただ、まもなくエリスは自分の能力を使う必要は無くなるはずでした。

何故なら、放っておいても人間の警官達が一般人を神の御子の側から遠ざけてくれる筈だからです。

ミナは神の御子——日下部まろん——の乗っているジェットコースターのコース上に着地しました。

ここまでは、エリスも事前のブリーフィングで聞いていたとおり。

「さて、どう出るか…」

そう呟いたエリスは、直後に声にならない叫びを上げました。
再び空中に舞い上がったミナが天使の力でジェットコースターの
レールを破壊してしまったからです。

「アン！」

コースターが宙づりになっている様子に気づき、小さく叫んだエリス。

しかし、大きく動揺することはありません。

以前とは異なり、アンがどこかに行ってしまうということは無い
と確信出来たからです。

それに。

「（ユキ様がいるから、大丈夫）」

堕天使・ユキのことを信じて、改めて意識を集中したエリス。
自らの領域の周辺部を搜索して、状況の変化に気づきました。

「（何か、こっち来る！）」

魔界の住人達が設置した、極薄い結界の内部に展開した自分の能力の及ぶ“領域”に、何者かが接近して来ていました。それも空中から。

「（天使？ それに…）」

エリスが見たの一人は背中から翼を生やした少女。

天使にも思いましたが、これほど幼い天使はこの戦場には居ない筈でした。

そしてそれに付き従う羽の生えた黄金色の四つ足の獣。
こんな獣は、魔界では見た事ありません。
人間界にもこんな巨大な空を飛ぶ獣は存在しないはずでした。

「（何者だ？ アイツ）」

エリスが可能性について思いを巡らせていると、ポケットに入れていた携帯電話が震えました。

「ノイン様？」

「エリスですか。少し、困ったことになりました」

電話の主は警備センターで指揮を執っているはずのノインでした。

「あの天使は一体どこの部隊の者ですか？」

「天使？」

「背中に羽根、生えてますよ？ まさか、正統……」

「それはありません。成る程、羽根を生やしましたか……」

「何か知ってるんですか？」

「それは後で。それとも一つ、人間で無い反応があるようですが」

「はい。黄金色の変な四つ足の獣が。空を飛んでいます、何ですか、アレ？」

「やはり……」

ノインは何かを知っているような口ぶりでした。

「ノイン様。知っているなら早く教えて下さい」

「彼女は、人間の魔法使いですよ。背中の羽根は魔術で出したのでしょう」

「魔法使い？」

「魔術を使える人間の総称です。獣は、使い魔といった所でしよう」

「それで、どうしますか？」

エリスは“彼女”達の様子をちらりと見やりながら言いました。

「もちろん、神の御子に近づけてはいけません」

「つまり、やつつけければ良いんですね」

「それともう一つ」

「何ですか！？」

「彼女を傷つけてはいけません」

「は！？」

「魔法使いとは言え、彼女は神の御子と違って普通の人間なのです。うっかり攻撃して、死んでしまったりしては後で魔王様に叱られることになりますよ？」

「そ、それは…少し嫌かも」

「理解できたら、上手く彼女たちを追い返す方向でよろしく」

「しかし…ノイン様？」

エリスの呼びかけもむなしく、既に電話は切れていました。

「しょうがないな、もう」

電話をポケットの中にしまいなおしたエリスは、能力を使う一方でその人間達を注視していました。

彼女たちは、結界に近づくよりも高度を上げる方を重視している様子で、結界との距離はさほど詰まっています。

どうしてこんな無駄なことをするのだろう。

そう考えて、エリスは気づきます。

彼女たちは、他の人間達に自分たちの姿を見られたくないのだと。しかし、彼女たちはある時点で上昇を止め、今度は降下しつつ前進を始めた。

海面に突き出たジェットコースター『ネプトウヌス』の方角に。

「ふっ」

エリスの口元に不適な笑みが浮かびます。

その直後、結界が張られていると思われる空域に彼女たちが飛び込みました。

そのまま前進を続けると思われた彼女たち。

しかし突如前進を止めてしまい、結界の外へと出て行きました。

その様子を見て、エリスは安堵します。

神の御子とは違い、彼女は障壁を展開する能力は無い様子でした。ノイン様が彼女たちを傷つけてはいけないと言った理由がエリスにも理解出来ました。

彼女たちは元来た場所に戻ることは無く、結界の外側辺りで制止していました。

「くすくす」

彼女たちが能力の影響から脱したという訳ではなく、わざわざエリスはそうに感情を刷り込んでいたのです。

彼女たちが制止したところで、改めてエリスは彼女たちの様子を注視しました。

「（あんな子どもが…）」

暗がりで見界はやや制限されていますが、その人間は未だ年端も行かぬ少女でした。

少女は人間界の学校に通う娘が良く着ている服を着ていて、それが背中に翼を生やしてふわふわと飛んでいるのは、エリスの知る人間界に住むヒトに関する知識からすれば冗談としか思えません。

もちろん、魔界に住む人間は魔術で飛ぶことが出来るため、全くあり得ないとまでは考えなかったのですが。

そしてその少女に付き従う黄金色の獣。魔界で似た種は思い浮かばなかった上、人間界ではこの形の獣が空を飛ぶことは出来なかったはずなので、ノインの言う通り、魔術で作りに出された使い魔なのだとしてエリスは想像します。

ややあって、再び少女達は結界の中へと突き進んで行くとして、前回同様再び結界の外に出て来ました。

「くすくす。無駄無駄無駄あ」

相手には聞こえないのは承知で、エリスは勝ち誇った声を上げました。

●水無月ギヤラクシーワールド・ジェットコースター『ネプトウヌス』

“怪盗ジャンヌ”の姿に変装したミナは、ジェットコースターを破壊した後、上空で周辺部を観察していました。

自分がここにやって来たと判るように、目立つようにここまで跳躍を続けて来た甲斐あり、遊園地の中に警察が侵入して来ていました。

若干予定はずれているものの、ここまでは計画は上手く行っている。

ここまでの行動をそう評価していたミナ。

“本当に、これで良いの？ レイ”

眼下のレイにミナは心の声で呼びかけました。

もちろん、神の御子の近くで演技に忙しいレイからの返事はありません。

ミナも返事を期待していた訳でもありません。

“そろそろ、次の作戦に移るわよ、レイ。大丈夫、ちゃんとするから”

そつ心の声を送ると、ミナは両手を空に掲げます。

「雷よ！」

自分たちの居た世界では滅多に使うことの出来ない術。

影響が広範囲に及ぶからですが、この世界であれば気兼ねなく使うことが出来ました。

最初の言葉は景気づけで、実際の術は心の中で詠唱されています。詠唱に時間がかかるのは、それだけ大きな呪文であることを意味しますが、周囲に多くの仲間を配置し、不意打ちを受ける心配だけはありません。

既に暗くなっていた空に黒雲が沸き起こりました。

その様子を見上げていたミナは、無言で右手を振り下ろしました。

一瞬の光。直後に雷鳴。それは、自然界に存在する雷と同様のものの。

自然界のそれと異なるのは、自らの意志で狙いをつけることが出来ること。

狙い過たず、雷は神の御子を直撃していました。

＊

「キャアア！」

空に黒雲が広がったと思うと、まるん達を光が包みました。同時に雷鳴。

近いなどというものではありません。ほぼ、直撃している様子でした。

一瞬、雷に気を奪われたたまるん。

途端、自分たちが乗っているコースターの車両が不気味な音を立てました。

「ま、まるん」

その音に気づいた都が、声をかけて来ました。

「静かにして！」

「まるん！？」

集中力を削がれそうになり、声を荒げたまるん。慌ててこう付け加えます。

「あ、ごめん…。なんか、声を立てると落ちちゃいそうで」

この程度の物を支えるのに、こんなに疲れるなんて。この前は体育館だって支えたのに、頑張れまるん！まるんは自分を励まします。

しかし、同時に気づいてもいます。

やはり、変身しなければ出せる力は制限されるのだと。

とは言え、隣に都がいる状態で変身は出来ません。
それ以前に、変身に必要なロザリオは、ロッカーに預けたままでした。

「確かに。もう、じれったいな」

すぐにレスキュー隊が来ると言うものの、今のところその気配はありません。

暗がりの向こうに誰か見えないか、注視したまろん。

その視界が、再び光に包まれました。

再び、乗客達は悲鳴を上げました。

「ちよつと…。今のもかなり近かった」

都がそう呟きました。

「本当に近かったですね」

後席より、アンの声がしました。

これは自然現象を装った、自分への攻撃なのでは無いか。

そう思ったまろんは、真上を見上げました。

「（…いた！）」

自分達の真上に、先程一瞬姿が見えたもう一人の自分が暗闇の空に浮かんでいる。

そのように、まろんには見えました。

「ジャンヌ？ やっぱり、このコースターを壊したのはジャンヌなの？」

隣から声がしたので、まろんは都の方を見ました。

都はまろんと上空のジャンヌの方を何度も熱心に見比べていて、その表情は安堵した表情にも見えませんでした。

もつとも、何故そう見えるのかはまろんには判りません。

「ここからじゃ良く見えないわ。本物じゃ無いかもよ」

何だか自分が非難されているような気がして、思わずまろんは反論しました。

「どうしてそんなことがまろんに判るのよ」

「そ、それはほら。ジャンヌは飛べないじゃない」

人間とは思えない程の跳躍力はあるけどね。

まろんは心の中で呟きます。

「どうしてまろんがそんなことを知ってるのよ」

「そ、それはテレビとかで…」

「ふん」

何故か、疑いのまなざしを向ける都なのです。

パート3（後書き）

偽ジャンヌが出てきたというのまるんちゃんはロッカーにロザリオを置いてきてしまいました。おまけにお友達の都ちゃんがいては変身は出来ません。

一体どうなるのでしょうか？

続きはちよつと間をおいてから書きます。

パート4（前書き）

今回はちよつと時間が掛かってしまいました。

書き写しの訂正をするのがやつとでした。

エリスは確かフィンと同じく墮天使の1人の筈です。天使ではないのです。

もしかしたら彼は仲間を生き返らせようとしているのでしょうかね。

パート4

● 水無月ギャラクシーワールド・ジェットコースター・『ネプト
ウヌス』

ジャンヌが破壊したと思われるジェットコースター『ネプトウヌ』の入り口に辿り着いた氷室率いるジャンヌ特捜班。
ジャンヌが未だそこに居ると知り、早速中に入ろうとしたところ、
警備員達に押し止められていました。

「ここを開ける！」

「この落雷です。危険ですのでお下がり下さい」

頬に傷のある警備員は、そう言うつと氷室達を外へと押し出そうと
しました。

「我々は桃栗警察署のジャンヌ特捜班の者だ！ ジャンヌがそこ
にいるのは判っているだろう！」

そう言い、海の方を指さした氷室は絶句します。

これまでに無かったことに、ジャンヌが空中に静止していたから
です。

そしてジャンヌの周りには雷が何度も落ちていました。

「警部！」

双眼鏡で海の方を見ていた春田が、警告の声を発します。

「どうした！」

「海に、誰かいます！」

春田に渡された双眼鏡で見ると、確かに海に誰かが居るようでした。

暗がりでも顔形は良く判りませんが、氷室にはそれがまるんに見える仕方がありませんでした。

その視界が、再び雷光によって遮られます。

「うわっ」

「大丈夫なのか？」

海面に漂っている人影は、どうやら泳ごうと藻掻いている様子でした。

彼女（氷室はその人影が女性だと確信していたのです）の近くに落雷があり、感電死してもおかしくありませんでしたが、彼女はとにかく生きている様子でした。

「こりゃあいかん。早く、あの子を救出……」

しかし、氷室達はその少女を救出することはありませんでした。

*

「エリスの奴、しくじったな」

押しかけて来た警官達が地面で動かなくなった後。

警備員の服装をした元人間達の指揮官・オットーは呟きます。

その前にも予兆があったのですが、警官達の姿を見て確信しました。

もっとも、予兆の方は直ぐに消えてしまったのですが、こちらに

については深追い不要とノインから指示が出ていました。

「隊長。撤収命令が出たそうです」

従兵として使っている少年——実際の年齢は少年どころではありません——が、そう彼に呼びかけました。

「了解。中隊総員には隊長——救出隊を収容後、予定の行動を取れと命令。それで判るはずだ。本部小隊はこの場で待機」
「はっ」

やはり計画に無理があつたのでは無いか。

エリスは出来ると言つたが、指示が細かすぎた。そんなことを彼は思い、そしてこう呟きました。

「あの嬢ちゃん達。どうして自分達だけでやろうとするかな」

そう呟くと、オットーは従兵の駆けて行つた先——コースターの駅舎——へと歩いて行くのでした。

●水無月ギヤラクシーワールド・ジェットコースター『マルス』

その少女と獣は、何度もエリスの領域に進み、そして引き返していました。

「学習能力が無いの？」

少女達の姿を見て、エリスは呆れたように言いました。

「（なら、もう少し“能力”を強めて…）」

エリスが次に少女に打ち込むべき暗示について考えていると、視界の隅で少女と黄金の獣の方向に今一人、接近しているのが見えました。

銀色の髪とその青年も背中に翼を生やしているところを見ると、彼も魔法使いか、さもなくば人間では無いのでしょうか。

彼は明らかに自分の姿を認めていて、それでいて自分には何もする事無く、少女と合流を計っているようでした。

仕掛けるか。一瞬思い、エリスは踏みとどまります。

この場から動いてしまつては、自分の能力の効果が薄れかねません。

エリスの役目はあくまでも、神の御子を襲撃する作戦。

その戦場の場の支配だから。

青年はやがて少女と合流しました。

青年は自分の方を指さして、それに対して少女は頷きます。

少女はノインの使う呪符のようなカードを手にし、何事か呟くと彼女の足下が光ります。少女はカードを空中に回転させながら投げ、手にしていた杖を掲げました。

カードは杖の上で静止し、そして光と共に消えました。

そのカードが何の意味を持つ物なのか。

ノインの呪符と同じように、何らかの術をかけているのでしょうか。そしてその対象は恐らく自分。

そう思い、エリスは身構えました。

「……？」

しかし、エリスの身には何事も起きませんでした。
何かが向かってくる気配ありません。

不思議に感じて少女を見ると、獣と青年と共に『ネプトウヌス』
の方に向けて前進を再開していました。それまでよりは大分ゆっく
りとした速度でしたが、その前進は止まることがありません。

「いけない」

そう呟くと、エリスはその場から跳躍しました。

一端地面に着地し、再度の跳躍。

その際、着地点にあった売店の天井に大穴を開けていますが、エ
リスは気にすることはありません。

エリスの視界の中で、少女達の姿が段々と大きくなりました。

青年は両手をこちらに向けて身構え、獣は口を開き、自分に対し
て攻撃を仕掛けようと身構えているのが見えました。

同時に、少女が驚愕と恐怖が入り交じった表情を見せているのも
見えます。

攻撃があるものと思い、エリスは空中で身構えます。

「攻撃しちゃ駄目！」

しかし恐怖に震えているはずの少女は、そう叫んで両手を伸ばし、
攻撃を制止していました。

一体何故？ そう思う間もなく少女はもう目の前です。

「（ごめん、ちょっと痛いかも）」

心の中で詫びつつ、少女の身体を蹴り飛ばそうとしました。
もちろん、手加減ならぬ足加減をして。

「え？」

しかし、エリスの足は少女に届く前に遮られました。それにぶつかった瞬間、少女の周囲が光り何かの紋様が現れました。

「障壁い！？」

構わず、障壁毎少女をエリスは蹴飛ばしました。

「ほええええ！」

「さくら！」

少女の悲鳴を背中に聞きながら、エリスは着地します。エリスが見上げると、早くも少女は空中で体勢を立て直していました。

「ちっ」

再び、エリスは空中へ跳躍します。

銀髪の青年の両手の間が光り、無数の礫とも思える攻撃——詳細は不明——が放たれます。同時に、金色の獣は炎を吐きました。直撃したところで、どうということは無風に思えましたが、服を駄目にしなくなかったので魔術でそれを防ぎます。

「この程度！？」

空中で体勢を立て直したエリス。

この時、無意識のうちに種としての力も使っているのですが、こ

の時ばかりは任務の方を優先していました。

「シールド！」

か
(
L

「とりやあつ」

少女の悲鳴が段々遠ざかって行き、やがてそれは暗闇の海に消えました。

着地したエリス。

「生きてる…よね、よね？」

その彼女の前の海面が盛り上がり、水流が正確に彼女に向け押し寄せました。

龍族——本人は認めていませんが——の力を以てしても、エリスは水圧の力でその場に立っていることは出来ずに地面に打ち倒されました。

「痛てて…」

自然の波で無いことは、波が直ぐに消えてしまったことで判ります。

そうであるとすれば。

「良かったあ」

倒れたままの状態で見上げると、少女が自分を見下ろしていました。

それを見て、エリスは安堵のため息をつきました。

しかし、安堵するばかりではありません。

少女の位置を確認して起き上がると、再び跳躍し少女を狙います。しかし、少女はエリスの攻撃を只待っていることはしませんでした。

少女はひらりとエリスの攻撃を回避、再びカードを取り出し囁きました。

「風よ、戒めの鎖となれ」

空中に魔法陣が描かれ、その上に立つ形で少女は杖を掲げます。取り出したカードを空中に投げると、それは回転しつつ杖の上で静止。

そして少女はそのカードの名を口にします。

「ウィンディー！」

一瞬、羽根を生やした女性の姿がエリスには見えました。
次の瞬間、エリスの身体の周りに風がまとわりついていました。
そしてエリスの身体は地面に落下せず、更に持ち上げられて行きました。

「何、これ。竜巻？ 違う、これは…。うわぁっ！」

エリスは少女の作り出した風により『ネプトウヌス』とは反対側に吹き飛ばされて行きました。

視界がぐるぐると回転し続け、流石のエリスも目を回してしまいます。

意識が飛ぶ前、エリスの視界に大観覧車が入ります。

その扉の開いたゴンドラから先程の少女と同じ服を着た黒髪の少女が、機械を手にして自分の方を見つめているのでした。

●水無月ギャラクシーワールド・ジェットコースター『ネプトウヌス』

レイが神の御子——怪盗ジャンヌに加えた火炎の術による攻撃は、障壁毎彼女を包み込み、海に落ちても炎が消えることはありませんでした。

ジャンヌの視界が奪われている隙に、レイはミナが倒れている場所へと飛んで行きました。

「おい、しっかりしろ！」

ミナが倒れ込んでいる支柱と見た場所は、通路を兼ねていました。

その上に仰向けにミナ——姿は怪盗ジャンヌ——が苦しそうに横たわっていました。

「…ごめん…ちょっと、気を抜いちゃった…」

ミナの右脇腹からは血が流れ出て白い衣装を赤く染め、身体の横で池となり下の海へと滴り落ちていました。

治癒力が高いとは言え、こんなところまで人間と同じで無くても良いのに。

そう、レイは思います。

「しつかりしろ。今、手当てする」

治癒の術を苦手とし、ミナ任せにしていたことをこれ程悔やんだことはありません。それでも、応急処置程度のことは出来ます。

「傷は浅い」

「気休めは良い…。レイ。それにしても…酷い格好ね」

上半身が殆ど下着姿となったレイのことを言っていました。

「私も油断した。とにかく、時間を稼いだ。今の内に撤退する」

そう言うつと、レイはミナの身体を両手で抱えました。

ミナの傷に障らないよう、ゆっくりとした速度で浮かび上がりました。

「！」

突然、飛行することを止めたレイ。

向こう側に人間達の物らしい灯りが見えました。支柱の影に隠れ、そのままじっとしている内に光は明後日の方を向き、レイはため息をつきました。

レイはゆつくりとノイン達が待っている警備センターの方向へ向かおうとしたのですが、そうは問屋が卸しませんでした。

「ち……。見逃してくれないか」

レイ達が浮かんでいる場所の左側。

そこに、このコースターの名物である海面上の水平ループがありました。

その頂点部分にジャンヌが立ち、自分たちのことを見ていました。

「！」

レイはジャンヌの姿を認識すると同時に、身体を水平方向に滑らせました。

直後、そのまま飛行を続けていれば居たであろう空間を、赤いリボンが通り過ぎます。

続いて、垂直上昇したレイ。その下では戻って来たりボンが、レイ達の方に向かって来ているのが判りました。

「う……」

全速で回避しようとしたレイ。

しかしミナのうめき声が聞こえたために一瞬動きが鈍りました。

「しまっ……」

ジャンヌのリボンが足に絡み付き、そのままレイはジャンヌが居

る場所まで勢い良く引き寄せられて行きました。

そのままコースに叩き付けられる寸前、レイは指先から光線を放ち、ジャンヌのリボンを焼き切ります。

そのまま脱出するには勢いがありすぎ、レイはコースにそのまま着地しました。

「どうやら、このまま行かせてはくれないようね」

そう呟くと、レイはミナの身体をコースの横にある通路の上に横たえました。

その間、ジャンヌに背中を向けていましたが、不思議とジャンヌは攻撃して来ませんでした。

「勝負！」

再び手中に剣を出し、水平ループの反対側にいるジャンヌと向き合います。

ジャンヌの顔に表情というものが消えていることにレイは気付きました。

先程の戦いでジャンヌにも一太刀ならず浴びせたため、ジャンヌの衣服もあちこち切り裂かれた状態で肌が露出していました。

しかし、恥ずかしがるそぶりも見せず、無表情のまま手にはリボンを携え、一步、また一步とジャンヌは歩み寄ってきました。

「はあっ！」

光球を再び、ジャンヌに浴びせたレイ。

先程と同様、障壁ごとジャンヌは炎に包まれます。

しかし先程と違い、炎に包まれながらもジャンヌはしっかりとした足取りで、前進を止めません。

「この！」

指先から光線を放ち、レイはコースターのレールを切断し、ジャンヌの足場を崩落させました。しかし。

「馬鹿…な」

無くなってしまったレール。

しかし、そこに透明な床があるかのように、ジャンヌは歩いていました。

「く…来るな！」

ジャンヌを包んでいた炎はレイの予想よりも早く消えかかっていて、レイは次なる光球を放ちました。しかし、それはジャンヌに届くよりも遙か目の前で弾け、炎も期待程は広がりを見せませんでした。

「障壁を…広げてる…」

「ミナ？」

「もっと、攻撃して。レイ。今が…チャンス」

「判った」

レイは、ミナに言われるまま攻撃を繰り返しました。それは全て、ジャンヌの遙か手前で弾けて消えました。

「今よ！ 突撃！」

ミナのその言葉だけで、レイには十分意図が伝わりました。

「うおおおおお！」

レイは光球を数発、前方に打ち込むと同時に剣を構え、突進しました。

光球は障壁に遮られることなく、ジャンヌを掠め、その後方で炸裂しました。

その爆風にあおられ、僅かにジャンヌがよろけます。

剣技を誇るレイであれば、その程度の間で十分でした。

瞬時にジャンヌに近接。

リボンの懷に飛び込むと、剣でジャンヌのリボンのステッキを弾き飛ばしました。

「ミナ！」

「了解！」

ミナが怪我人ということも忘れ、レイは叫びます。

そしてミナもそれに良く応えました。

ミナが障壁を操作することでジャンヌの武器であるリボンは、海面へと落下して行きました。

「たあっ！」

武器を失った相手でも、レイは全く遠慮しませんでした。

彼女相手に少しでも気を緩めることは、即、死。

そう悟っていたレイが剣を水平に振るうと、ジャンヌは後方に飛びました。

その着地点に向かい、光球が数発レイの背後から放たれます。

コースターのレールが消失し、足場を失ったジャンヌは視界から消えました。

「ミナ！」

驚いて、背後を振り返ると横たわったまま光球を発射した格好のまま、ミナが肩で息をしているのが見えました。

「大丈夫か」

「大…丈夫」

そう言うと、親指を立てて見せましたが、直ぐに表情を引き締め叫びました。

「レイ、後ろ！」

「！」

早くも立ち直り、音もなく背後に忍び寄って来ていたジャンヌの斬撃を辛うじてレイは受け止めました。

ジャンヌの手には、いつの間にか剣が握られていました。

「嘘…」

レイとジャンヌは互いに一步も引かず、つばぜり合いを演じていました。

それを見ながらミナは思います。

あの剣はリボンが変化したものの筈。

であるならば、私の障壁を超えて戻って来るなんてあり得ない。

「うおっ」

倒れているミナの目の前に、レイが飛ばされて来ました。

「障壁が…ミナ！」

「ごめん。気を抜いた」

レイに言い、ミナは再び集中しました。

「嘘…融合…出来ない!？」

「どうした！」

ジャンヌと対峙したまま、レイは叫びました。

「心を合わせられない」

「何だって？ それじゃ、彼女は……」

「レイ！」

ジャンヌは大上段に剣を構えていました。

隙だらけの身体に、剣を打ち込むレイ。

しかし、その剣は見えない壁に阻まれました。

光球による攻撃も、もちろん不発。

その間、ジャンヌは剣を構えたまま身動き一つしていませんでした。

相変わらず、ジャンヌの顔からは表情が消えていて、レイはまるで人形を相手にしているように感じます。

そしてジャンヌが遂に動きました。

その一瞬の隙に攻撃を加えるつもりだったレイ。

ジャンヌが剣を振り下ろした瞬間、レイは光球を複数放ちます。

その結果を見る前に、ジャンヌの振り下ろした剣圧による真空波と推測される攻撃がレイを襲いました。回避することは不可能でした。しかし、レイの後ろには動くことが出来ないミナが居るのです。

剣圧による攻撃はレイが急遽展開した障壁の威力を上回り、レイは攻撃を身体で受け止めることになりました。

「ぐはっ」

膝をレールについたレイ。

服は切り刻まれ、下着を別にすれば裸同然の姿となっていました。手にしていた光の剣も消えています。

しかし、そんな自分の姿よりもレイはまず確認しないといけないことがありました。

「ミナ…」

背後を振り返り、レイは啞然とします。

ミナの服——ジャンヌの服ですが——も各所で切り裂かれ、ミナは呼びかけにも応えずぴくりとも動きません。

「そんな…嘘でしょう？ 返事してよミナ！」

ミナの方に駆け寄ろうとしたレイ。

背後に殺気を感じ、咄嗟に前方——ミナの方角に飛びました。直後、ジャンヌが振り下ろした剣がレールを破壊しました。

剣圧による攻撃は今回は無く、レイに新たなダメージはありません。

「う…レイ…大丈夫……。判ったわ…」

「何が？」

「彼女の…心…暗闇……」

「もう良い。喋るな！」

「融合…するから…決めてよね」

「ああ、判ったから」

「三……一……」

直後、レイは最後の力を振り絞り突進しました。最早剣を生み出す力も残っていなかったレイは、自らの拳そのものに力を乗せ、ジャンヌに殴りかかりました。

「うおおおおお！」

レイの渾身の一撃は、障壁に妨げられることはありませんでした。しかし、ジャンヌの左手が天使の力を乗せたレイの右手の拳を止めていました。

「ぐ……」

「捕まえた」

確かにその声は神の御子の声でした。

しかし、声に生氣がありません。

レイの拳を掌で握りしめたジャンヌ。

只の少女の筈なのに、レイは振り解く事が出来ませんでした。

「（新体操……とかで鍛えているということか？）」

ジャンヌの腕を見て、冷静にレイは感じます。

左手で光球を放とうとしました。

しかし普段なら直ぐに作り出せる筈の光球を作り出すことが出来ません。

「（力切れってこと……）」

絶望を感じたレイ。

急にジャンヌはレイの腕を放しました。

何とか離れようと藻掻いていたレイは、後ずさりよろけます。

体勢を立て直そうとする間もなく、腹に大きな衝撃を感じ、レイはミナの倒れている場所まで吹き飛ばされました。

「うつ…」

レイが目を開けると、目の前にはミナの姿がありました。

「ミナ…ミナ！」

「レイ…。駄目…だったね。…やっぱり、二人だけじゃ……」

「ごめん。私がみんな悪かった…」

「レイの所為じゃ無いよ」

ジャンヌの足音が直ぐ側に迫っていました。

止めを刺しに来たということでしょう。

どうせ死ぬのなら、せめて最後は…。

最早立ち上がる気力すらなく、レイはレールの上を這いずって行きました。

「ミナ…」

「レイ…」

互いの手と手が合わされ、二人は覚悟を決めました。

「次の世界でも、きつと一緒に」

「ああ、約束だ」

そして目を瞑り、二人でその時を待ちました。

しかし、幾ら待ってもその時は来ませんでした。

ひよっとしたら、もう二人は死んでいるのかもしれない。

そう思い、レイは目を開けました。

ああ、やっぱり私達は死んだんだ。

だって、天使が目の前に立っていて……。

「天使!？」

そう小さく叫び、レイは半身を起こしました。

「未だ死ぬのは早いですよ。お二方」

暗闇の中でも光り輝く銀色の髪。

金色の瞳と白い翼。

「ユキ!」

どこから現れたのでしょうか。

何時の間にかユキがミナとレイの間に立ち、障壁でジャンヌの攻撃から二人を守っているのです。

パート4（後書き）

次回はまた手間が掛かります。
今度は上手に写してみます。

パート5（前書き）

今回はさくらちゃんと封印の獣ケルベロス・青年のユエが力を合わせて悪魔のトラップに立ち向かいます。

さくらちゃん達はまるんさんの共闘するシーンは殆どなしです。それでも彼女達は一生懸命に戦っています。

パート5

本来の姿を取り戻したケロちゃん――本来の姿なのでケルベロスと呼ぶべきでしょう――と共に夜空に飛び出したさくらは、一旦高度を上げました。

今のさくらは友枝小の制服姿。万が一にでも、誰かに自分の顔を見られる訳には行きませんでした。

ある程度の高度を稼いだ後、さくら達はコースターへと近づいていきます。

それにつれ、コースターの状況も明らかになりました。

「急げさくら！ あのコースター、もう長く保ちそうに無い！！」
「うん！」

ジェットコースターへと飛んで行こうとしたさくら達。ですが、

「あれ！？」

気がつくと、さくらの目には崩れ落ちたジェットコースターのコースでは無く、大観覧車が映っていました。

「何しとんのやー！」

ケルベロスの声で我に返ったさくら。

慌てて、百八十度反転してコースターへと前進を再開します。

「急げさくらー！」
「うんー！！」

再び、ジェットコースターへと接近しようと思いました。

「ケロちゃん！」

今度は、さくらの方が先に気付いてケルベロスに声をかけました。

「あゝ、又、戻つとる！？」

「もう一度！」

改めて、ジェットコースターの方へ向かおうとしたさくら達。しかし、何度やっても結果は同じでした。

「何をしている。ケルベロス」

ユエの声がしたのは、さくら達が再びジェットコースターへと向かおうとした時でした。

「ユエか。遅かったやないか！」

さくら達がコースターに向かおうと夢中になっていた間に、いつの間にかユエが側まで来ていました。

「避難する客のせいで、元の姿に戻れなかった。それよりも、あれを見る」

ユエは、先程さくらが乗ろうとしていたジェットコースター『マルス』の方を指差しました。

「何や？ コースターの上に人がおる？」

ケルベロスの声を聞き、さくらもユエの指の先、コースターの中のロケットを眺めました。

「本当だ。けど、良く見えないよ」

「あいつは何者や？」

「さあな。ただ、一つだけ明らかことがある」

「何や？」

「あのコースターの辺りを中心に結界が張られているようだ」

「何やて！？ 全然気づかんかった」

「役に立たない奴」

「何やて！」

馬鹿にされ、ケルベロスは怒ります。

「かなり薄い結界だからな。気づかなくても無理は無い」

「そうか。その結界があるから、コースターに行けないんだね」

そう言い、さくらは肯きました。

「少し、違うようだ。結界は通り抜けることが出来る程薄いものだ。一体何のために張っているものか、判らん」

ユエは首を傾げました。

「恐らくは、結界の中にわいらを先に進ませない何かがあるんな」

「結界は、その何かを外に漏れ出さないためにあるのだろう」

「その何かって？」

「……」

沈黙してしまったユエ。しかしすぐにケルベロスが呟きます。

「匂い…かもしれん」

「匂い？」

「さつきも、あのコースターに乗らずに引き返したな、さくら」

「うん。あ…！ 蜜柑の香り」

「そう。蜜柑の香りや」

「何の話だ」

「さつき、あの子のいる辺りで蜜柑の匂いがしたの」

「あいつは匂いで人を惑わす魔法を使っているのかもしれない」

「それなら、何とかなるかも」

「成る程。試してみる価値はありそうだ。だが…」

ユエは、コースターの人影が気になる様子でそちらをじっと見ていました。

「大丈夫やて。向かってこん所を見ると、攻撃力は大したことないやろ」

「だがな」

「大丈夫だよ」

さくらはそう言うと、さくらカードを取り出し杖を縦に掲げます。足下に魔法陣が描かれ、さくらはそのカードの名を叫びます。

「盾（SHIELD）！」

さくら達の周囲に、淡い色の障壁が展開されました。

「成る程、シールドは魔法も防ぐさかい」

「うん。万が一攻撃して来ても、盾が守ってくれるよ」

「だが、盾を張ったままで移動出来るのか？」
「だから、ゆっくりと動くの」

ゆっくりとジェットコースターへ向けて移動を再開したさくら達。
さくらを先頭にケルベロス、ユエの順番で進み、ユエは背後を警戒しつつ進みました。

その時、辺りが光ったかと思うと雷鳴が響きます。

「ほええっ！！」

「これは近いで」

「こんな時に」

自然現象である雷が実は人為的に起こされたものであることも知らず、さくら達は前進を続けました。

「ここだ。この先に結界がある」

「うん」

強力な魔力を持つさくらですら、見落としてしまいそうな僅かな気配。

ユエさんはどうして気づいたのだろうとさくらは思います。

「成る程。巧妙な結界やな」

「ケロちゃん、判るの？」

「こりゃ、余程近づかんと判らんで」

「翔」の呪文と「盾」の呪文の同時使用。「盾」は術者の大切なものから優先して守るとは言え、慎重に移動して行くさくら。

「どうやら、上手くいったようやな」

ユエが結界だと言った場所を潜り抜けても、三人はジェットコースターへ向けて飛行を続けていました。

向こうのコースターは今にも落ちてしまいそうで、さくらは焦れたい思いを抱きます。

そればかりでなく、こうしている間にも続けざまに雷鳴。雷がコースターを直撃しているようにさくらには見えて仕方がありませんでした。

もう少し速度を上げようか。そうさくらが声をかけようとした時です。

「さくら！ 奴が来る！！」

ユエの警告の声に振り向くと、人影が丁度さくらに向けジャンプして来る所でした。その跳躍力と速度は、さくらの「跳（JUMP）」にも匹敵、いや上回っているように思われました。

「さくら！！」

人影の正体が明らかになるに連れ、さくらは目を見張ります。

それは白髪——光の加減でそう見えたのです——の少女で、知世の家のお手伝いさんが着ているようなエプロンドレス姿でした。

一見戦闘とは不釣り合いに見えるその格好。しかし、見かけと戦闘力が別物であることをこれまでの経験でさくらは知っています。けれど。

「攻撃しちゃ駄目！」

さくらを守ろうとそれぞれ攻撃をかけようとしたケルベロスとユエの前に立ちふさがり、両手を広げてさくらは止めました。

二人の攻撃を通し、向こうの攻撃だけを防ぐ。

さくらにそのようなことが出来るのかについての不安があったという訳ではありません（その懸念については、後になってから気づきました）。

さくらが止めたのは、これまで戦って来たクロウカードの本体や、誰かが魔法で作り出したモノとは違う、生命の息吹を感じたから。そんなさくらの思いも知らず、エプロンドレスの少女はさくらに向け足を振り上げました。スカートが捲れ下履きが露わになるのが見えますが、その足はさくらの手前で遮られました。

「障壁い！？」

「盾」の存在に少女は驚いた声を上げたものの、そのまま少女は足を振り抜きました。

「ほええええ！！」

驚いたことに少女は「盾」を足の力だけで動かしていて、さくらは自身が作り出した「盾」に押される形で後方に飛ばされました。

「さくら！」

ケルベロスとユエが、飛ばされそうになったさくらを受け止めてくれたため、何とか空中でさくらは体勢を立て直すことが出来ました。

さくらの手には、一枚のカード——「盾」——があり、既にシルドの効果が切れたことを教えてくれています。

「次、来るぞ！」

一端着地した少女は再度跳躍して、さくらに迫りつつありました。相手の敵意が明らかとなった以上、ケルベロスとユエは遠慮無く、少女に向け攻撃を加えます。

「ちっ」

「魔術も使えるか」

が、ケルベロス達の攻撃は少女の手前でまるで吸い込まれるように消えてしまいました。

「この程度！？」

ジャンプを繰り返していたので飛ぶことが出来ないと思われた少女。しかし、空中に浮かんだ状態で姿勢を変更していました。

「さくら、また来るで！」

「うん！ 盾（SHIELD）！！」

再び、さくらはシールドを張り直します。

「とりゃあっ！！」

少女はかけ声と共に、先程とは比べものにならない勢いで「盾」毎、さくら達を蹴り飛ばしました。

ケルベロスとユエはさくらを助けようとしたましたが、三人は盾に押されるように、暗闇の海へと飛ばされて行くのでした。

●水無月ギャラクシーワールド・大観覧車

この遊園地の中で最も高い場所の一つである大観覧車。

その天辺のキャビンの上にエリオル達の姿がありました。

そのキャビンの中には客が居るのですが、気づかれると面倒なので眠らせています。

「あらら。あの子達、海に飛ばされちゃったよ。どうするの？」

手を額に当て、遠くを眺めていた奈久留ことルビー・ムーンは言いました。

「大丈夫。さくらさんは、僕以外の何者にも負けることは無いよ。そう、『絶対、大丈夫だよ』ですよ」

大きな杖を手にしたエリオルが言いました。

「どうやら、エリオルの言う通りのようですね」

スピネル・サンのその言葉で、ルビー・ムーンは目を細めます。

「なかなか、やるじゃない？」

●水無月ギャラクシーワールド近く・海上

「ほええええ！」

悲鳴を上げつつ、「盾」もろとも海に飛ばされて行ったさくら達。「盾」は途中で消滅してしまい、空中で姿勢を立て直すことも間

に合わず海に飛び込んでしまう直前、飛ばされながらさくらは次のカードを取り出し叫びます。

「水（W A T E R Y）！！」

本当なら、もっと適当なカードがあつたのかもしれませんが。しかし、それを考える余裕すら無く、さくらはその時目についたもの——海——を見て、それを操ることの出来るカードを選択しました。

カードを使用した直後、海面が大きく凹みました。

それだけ落下までの時間が伸び、その間にケルベロスとユエは体勢を立て直しさくらを二人で支えます。さくらの「翔」の力もあり、何とか空中でさくら達は静止しました。

「ありがとう、ケロちゃん。ユエさん」

「礼は良い。とにかくあいつを何とかしないと」

ユエが指差した先には、エプロンドレスの少女が立っていました。

「さくら、反撃や！ あいつは岸壁におる！」

「うん！」

さくらは新たにカードを使うことはしませんでした。

何しろ反撃の材料は周り中にあるのです。

「ウォーティさん、お願い！！」

さくらが願うまでもありません。ウォーティの力により海面が凹んだ分、周辺の海面は盛り上がっていました。

そのままでも岸壁に波が叩き付けるところをウォーティの力も加

わり、さくらは岸壁に立つ少女に水流を浴びせます。

水流の後を追うように、陸地へと飛行したさくら達。

見下ろすと、水流に打たれた少女が立ち上がったところでした。

「良かった。大丈夫みたい」

少女が無事な様子を見て、さくらは呟きます。

地上の少女もさくらを見上げ、ほっとした表情を見せた気がしました。

「さくら、来るで！」

地上から人間技とは思えない跳躍を見せた少女。

さくらは、彼女の攻撃をただ待っていることはありませんでした。

「風よ、戒めの鎖となれ」

空中に魔法陣が描かれ、その上に立つ形でさくらは杖を掲げます。

「風（WINDY）！」

呼び出されたウィンディは少女の身体にまわりつき、そして竜巻のように彼女を遊園地の外へと運んで行きました。少女の悲鳴を乗せて。

●大観覧車

さくら達に取り残される形となった知世。

もちろん、ただ待っていた訳ではありません。

愛用のビデオカメラを手にして光学ズームを最大にしてさくら達の活躍をビデオに収めていたのです。

とはいえ、知世の居る観覧車のキャabinは地上百メートルの高さにあり、高度差と距離、そしてさくら達の移動速度の関係で、思う様な絵が中々撮れないでいたのです。

「さくらちゃん！」

今日、さくらが戦っていたのは使用人の服装を着た少女。

少女はさくらの魔法をもとめせず、さくらを追い詰めている——
そのように、知世には見えたのです。

とはいえ、知世に何が出来ても無く、さくらが何とかしてくれると信じて、カメラを構え続けることしか出来なかったのですが。

少女の攻撃により、海に飛ばされたさくらを見て、知世は叫び声を上げました。しかし、すぐに安堵の表情を浮かべます。

さくらが飛ばされた方に大きな波が起こり、岸壁に立っている少女に襲いかかり、押し流しました。直ぐに少女は立ち上がり、さくらに攻撃を仕掛けましたが、さくらは直ぐに魔法——ウィンディー——を使い、少女を吹き飛ばしたのです。

少女は風の渦に巻き込まれ、ぐるぐると回りながら知世がビデオカメラを回している観覧車へと近づいてきました。

「変わったメイドさんですわね」

ファインダー越しに少女を捉える知世。少女の肌が褐色であることが、少女が近づいて来るにつれ明らかとなって来ました。

彼女を巻き込んだ風の渦は観覧車を逸れ、海の方こうへと移動して行きました。

風の渦に巻き込まれた少女を知世は何時までも追い続けていました。

●ジェットコースター・『ネプトウヌス』

「急がなくちゃ」

行く手を阻んだ少女を排除し、さくら達は事故を起こしたジェットコースターへと進んで行きました。

幸いにして海に転落しかけたコースターの車両は未だ無事で、さくら達は安堵のため息を吐きました。

「あいつ…」

「何か、匂うな」

「クロウさんと、何か関係があるの？」

「いや…。ただ、どこかで嗅いだことがある」

ケルベロスが彼女の匂いを確かめるかのように鼻を鳴らします。

「龍の者…」

ユエがぼつり、と呟きました。

「龍？ ドラゴン？」

「人間の間に伝わっているのとは少し違うけどな。けど、その話は後や」

ケルベロスは首をコースターの方に向け、横を向いていたさくらに注意を促しました。

コースターの人に自分達の姿を見られる訳にはいかない。
そのような訳で、さくら達はコースターの乗客に姿を見られない
ように慎重に背後から回り込みました。

「さくら、どないする？」

「うん。これを使おうと思うの」

さくらが手にしていたカードは、「THE FLOAT」と書か
れていました。

「フロートのカードか！」

「うん。これなら…」

さくらがカードを使おうとした時です。

コースターが突然動き始めました。

それも、海面に落下するのではなく、コースに戻って行く方向で。

「何！？」

「何やて！！」

「ほえええ！」

三者三様に驚きを表現している間もコースターは上昇を続けてい
ました。

「これも…龍のチカラか」

「怪盗ジャンヌさんが何かしてるのかも…」

「兎に角、カードキャプターの出番は無くて済みそつやな」

そう言いつつ、さくら達が緊張を解こうとした時。コースターの
動きが止まりました。

「ほえ!?!」

続いて、女の子の悲鳴が響きました。

コースターから今の悲鳴の主らしい人影が、海面に向かって落下しつつありました。

「大変!?!」

「さくら!」

慌てて、女の子を受け止めようとさくらは飛んで行きました。

ジェットコースター『ネプトウヌス』は海面から百メートルの高さがある。

さくらが読んだリーフレットにはそう書いてありました。

そんな高さから落ちれば、下が海でも一溜まりもない。

何としても助けなきゃ。

女の子を受け止めようとしたさくらをユエとケルベロスも追いかけます。

ケルベロスはさくらの背中に叫びました。

「さくら、フロートのカードや!」

「そうか!」

今し方使おうとしていた「浮^{フロート}」のカードは、さくらの手の中にありました。早速、カードで少女を空中に浮かべようとしたさくらですが。

「上だ! さくら!」

「ほえええ!?!」

再び、コースターが海面に向かって落下しつつありました。そしてそれは、女の子を助け出そうとしていたさくらの真上だったのです。

「ほええええええええええ！！」

慌ててさくらはコースターを回避しました。しかし、コースターはそれ以上落下することは無く、再びコースに向かって急速に戻りつつありました。

「さくら！ 下だ！！」

ユエの声が下から響き、さくらは慌てました。

「大變！！」

慌ててカードを手にしたさくら。

「あかん、間に合わん！！」

ケルベロスの悲鳴のような声の下から響きます。

「キャアアアアア……」

その更に下から、女の子の悲鳴がさくらの耳に届きます。

「駄目！間に合わないよ！！誰か、時間を止めて！！」

後から考えれば自分がそれをすれば良かったのですが、その時さ

くらは「浮」^{フロート}のカードを使いながらそう思っていたのです。

女の子を助けようと、海面に向かってユエは急降下を続けていました。

人間に見られてしまう危険はありましたが、人一人の命に変えられるものではありません。

さくらの魔法はまだ発動されず、これはもう駄目かもしれない。

ユエは思いますが、最後まで希望は捨てません。

その時、ユエの身体を風が通り過ぎていきました。

急降下していたので、下から上への風は感じていたのですが、それとは別の風が吹き上げてくるのを感じたのです。みると、海面に向かって落下しているはずの少女が、風に流されるように宙を舞っていました。

「…彼の者の身体を宙に浮かべよ！ 浮（FLOAT）！！」

さくらの魔法か！？ ユエの考えを打ち消すかのように、主が魔法を唱える声から響きました。

すると少女の身体がふわりと浮き上がって行きました。

ユエの方も少女に近づいて行き、彼女の身体を抱き抱えます。

ユエ達にとっては幸運なことに、黒髪のショートカットの少女は、気を失っていました。

「良かった。間に合ったよ」

少女を抱き抱えたユエが上を見上げると、さくらがほつとした表情でこちらを見ていました。

*

絶対に間に合わないと思った魔法が何とか間に合い、さくらはほっと一息。

「さくら、あれ」

「ほえ？」

ケルベロスが首を向けた方を見ると、ジェットコースターも停止しつつありました。

「一件落着やな」

「うん」

先程から断続的に続いている雷が、またコースターの向こう側に落ちました。

「行こう。雷を受ける危険がある」

「うん」

ユエに言われ、さくらも肯きます。

ユエが少女を抱え、さくら達は取りあえず陸地へと向かうのでした。

●大観覧車

「何とか、間に合ったようですな」

観覧車のキャビンの上で、さくらの戦いを見守っていたエリオル達。

「どうしてあの子に手助けを？」

エリオルの脇に控える、スピネル・サンは言いました。

「エリオルらしくない」

同じく、ルビー・ムーンはつまらなさそうに言いました。

「私の予定に無いことは、好まない。ただ、それだけです」

エリオルは呟きました。

「だとすれば、あれは貴方の予定にあることですか？」

ジェットコースターの方を注視していたスピネルが、エリオルに注意を促します。

エリオルを見ると、ジェットコースターでは戦いの第二幕が開催されようとしていました。

「無いね。だが…さくらさんが絡まないのなら、私にも関係の無いことだ」

そう言つと、エリオルはさくら達の方に視線を戻してしまうのでした。

パート5（後書き）

前回のあのジャンヌは何者でしょうか？

騒ぎを起こしたジャンヌは堕天使の女の子が化けたものと判明しましたがあのジャンヌは何者でしょうか？まさかエリオル君？

パート6（前書き）

今回は割り込みを入れてみます。

今日はさくらカードの矢のカード^{アロー}を変えるシーンをつけてみたいで
す。

パート6

少女を助けたさくら達は、取りあえず近くの陸地へと降り立ちました。

ジャンヌが出現したために来場客が避難したためか周囲に人影は無く、さくら達が見とがめられることはありませんでした。

さくらはユエが抱いている少女の顔をしげしげと眺めます。

「この人、まるんさんの…」

ユエが助けた少女に、さくらは見覚えがありました。

自分の命を助けてくれた大恩人。日下部まるんの友人の筈でした。

「ジャンヌを追い回している刑事の娘ではないか？ということとは・
・。」

「まるんさんもあのコースターに？」

「なら、あそこに運ぼう」

ユエの提案で、少女をジェットコースターの駅舎に運んで行くことにしたさくら達ですが。

「おい待てさくら！ あっちを見い！！」

ケルベロスが叫びました。

彼の首の指し示す方角を見たさくら達。

そこでは、新たな戦いが激しく交わされていました。

「ほええ！！ 怪盗ジャンヌさんが…二人！？」

「どちらが本物なんや？」

「どうする？」

「決まってるよ！」

さくらは再びフライのカードを用いて空に舞い上がりました。

「この娘どないするんや！」

「ケロちゃんお願い！」

それだけ言い残し、さくらはコースターに向けて飛んで行きました。

「何やて！？」

「…主の命だ。悪いな」

ユエはそう言うと、近くのベンチに少女——都——を横たえ、さくらの後を追いました。

「お、おい。待て！ …わいにどないせえっちゅうんや」

残されたケルベロスは、ベンチに横たわる都を見てため息をつきました。

● ジェットコースター・『ネプトウヌス』上空

再びジェットコースター・『ネプトウヌス』の近くに辿り着いたさくら。

ジェットコースターの上では二人のジャンヌが激しく戦っていました。

勝負はあらかたついていて、片方のジャンヌがもう一人のジャンヌを新体操のリボンのようなもので拘束していました。

どちらを助けたものか。さくらは現場近くまで来て戸惑っていました。

「どっちが本物なんだろう？」

「判らんな」

首を傾げたユエ。しかしその一方で、現在追い詰められている方が偽物なのではと考えても居たのです。

「だが、どちらか片方は人間では無い。そして恐らく……」

「ユエさん！ あれ！！」

二人のジャンヌの間に、黒い影が割って入りました。

片方のジャンヌを拘束していたリボンを剣で切り裂き、その黒い影が正体を現しました。

暗がりで見えないものの、それが白い翼を持つ少女だということは判りました。

「翼……。あれは、何！？」

「天使……。まさか、実在していたとは」

ユエは驚きの表情を隠せません。

「天使？　じゃあ、天使と戦っている方が偽物のジャンヌさんなの！？」

「何故、そう思う？」

「怪盗ジャンヌさんは悪魔さんを封印する時、『神の名の下に』って言ってた。天使は神様の使いなんでしょ？　だったら……」

さくらは、今“天使”と戦っているジャンヌと先程まで追い詰められていたジャンヌの方を見比べます。きつと、プティ・クレアを持っている方が本物の怪盗ジャンヌさん。そう思い、さくらが助けに行こうと動きかけました。

「さくら！ 何かが近づいて来る！！」

ユエが警告の声を上げました。

「え？」

ユエが指差す方向を見ても、さくらの目には暗闇しか見えません。

「何？」

「感じないか。あのヒトの形をした龍のニオイだ」

「ほえ？」

惚けた声を発していたさくら。

しかし、やがて目を暗闇の一点に見据えます。

「あの娘なの？」

「ああ。近づいて来る。まずは、こちらが先だな」

「うん」

さくらは肯くと、ユエと共に暗闇の向こう側にある敵——エプロンドレスの少女——に向け飛んで行きました。

「（本物のジャンヌさんは、神様に守られているから大丈夫、だよね）」

そう、心の中で言い訳をしながら。

●水無月ギャラクシーワールドの近く・海上

暗闇の中、さくら達は先程戦った少女の気配に向け飛んで行きま
した。

彼女の実力を知るさくらは、ユエの助言に素直に従い、真っ直ぐ
気配には向かわず海側を回り込むように進んで行きました。

驚異的な跳躍力を持つ彼女も飛ぶことだけは出来ないらしいから
です。

「あの子の子様子は？」

「海沿いを跳躍を続けているらしい。待て！」

怪盗ジャンヌが出現したためでしょうか。

海上には海上保安庁の巡視船がこちらに向かって何隻も航行して
いました。

その内の一隻が、大きく傾ぎ、直ぐに元に戻りました。

やがて、さくら達の方に向け近い方向にあるもう一隻が同様に傾
ぎます。

「あれが！？」

「源義経を気取っているのか」

「よしつね？」

「歴史の時間で習わないのか？」

「だって、歴史は六年生でやるんだもん！」

「その話は後だ。…来るぞ」

さくらは杖を構え、取りあえずシールドを展開します。

直後、シールドに衝撃が走り、さくら達は跳ね飛ばされました。予め衝撃を予想していたため、さくらはすぐに体勢を立て直しました。

「次、来る！」

さくらの足下に浮かんでいた解を足場に、エプロンドレスの少女がさくらに向かって来ていました。

今度の攻撃もシールドが阻みましたが、これまで一撃離脱に徹していた少女は今度は蹴りと突きの連続攻撃を仕掛けてきました。

「きゃっ」

少女が攻撃を繰り返す度、さくらはシールドの中を右に左と振り回されます。

「ちっ」

ユエが反撃するものの、少女はあっさりと回避し、海上に降りました。

「ここは場所が悪い。移動しよう」

「え！？」

「見ろ、奴の足場だらけだ」

さくらが足下を見ると、解が何隻も連なって停泊していました。

「駄目だよ！ そうしたら、あの娘がジャンヌさんの方に行っちゃっ」

そう言うと、さくらは新たなカードを取り出しました。

「波（WAVE）！」

さくらが引き起こした波で、解が大きく揺れました。

足場が悪いためでしょう。少女の再度の攻撃は、一撃しただけですぐに降下して行きました。

ただ、その一撃が強烈でさくら（とユエ）はシールド毎コースターの方へ向け蹴り飛ばされてしまいます。

「防ぐだけでは勝てないぞ」

「判つてる！」

さくらはカードを一枚取り出しました。

「クロウの創りしカードよ、古き姿を捨て、生まれ変われ！ 新たな主、さくらの名の元に！ 矢（ARROW）！」

未ださくらカードにしていなかったカードの一つ、「矢（ARROW）」をさくらカード化したさくらは、早速カードの能力を使います。

さくらは出現した弓を引き絞り、一本の光の弓矢を放ちました。

少女と言えば、未だ揺れ収まらぬ解を足場として、再びさくら達の方へ向け跳躍していました。

矢が飛んでくる状況を認識したのでしょうか。少女は空中で身体を捻り軌道を変え、矢から逃れようとしていました。しかし「矢^{アロー}」の矢は一本が二本、二本が四本にと次々と分裂、最後には無数の光の矢となり少女を襲いました。

「痛っ！！」

矢を避けきれず、何本かの矢が少女に突き刺さり、そのまま少女は落下して行きました。

「ウェイブさん、お願い！」

さくらが戦っている間、海面をかき回し続けていた「波（WAVE）」は、艇の上に降り立とうとしていた少女の足下を浚います。

「うわっ」

続いて、海の中に転落した少女を一際高い波が襲い、コースターとは反対側へと悲鳴と共に押し流して行くのでした。

「だ、大丈夫かな。あの子」

「心配するな。あいつが龍族だとすれば、怪我一つしてないだろう」

「そんなに龍族さんって頑丈なの？」

「クロウが言うにはそうだが」

「でも、溺れたりしない？」

「泳ぎも得意だそうだ。心配無い」

「じゃ、今度は怪盗ジャンヌさんを助けに行かないと！」

「ああ」

再び、『ネプトウヌス』の方へ、さくら達は引き返すのでした。

● ジェットコースター『ネプトウヌス』上空

「何、これ…」

さくら達が再びジェットコースターに引き返して来た時、そこは既に戦場ではありませんでした。しかし、コースターがあちこちで崩落しているばかりか一部では火災すら発生しており、ここが戦場であつたこと、そして戦いが凄まじいものであつたことを示しています。

さくらは、暗闇の中、ジェットコースターのメンテナンス用に設けられていた通路やレールの上を陸地に向かって歩いて行く人々を目撃しました。

「何かが遠ざかっている気配がするな」

「ほえ？」

ユエが指差した方角を見やるさくら。しかし、そこに見えるのは暗闇ばかり。

「ジャンヌさんは？ まろんさんは？」

「無事を祈るしか無いだろう。もう戦いは終わった」

「うん…」

近寄つて、確認したい衝動に駆られたさくら。しかし、人間に自分の正体を見せる訳には行かず、ケルベロスが待つ陸の方へと進んで行くのでした。

● ジェットコースター・『ネプトウヌス』の近く

さくらが助けた少女——都——と共に置き去りにされたケルベロス。

来場客は避難したとはいえ、遊園地のスタッフや警察官が通り過ぎる懸念もあり、ケルベロスは縫いぐるみのケロちゃんの姿へと変化して、ベンチに横たえられた都の横にちよこんと座っていました。ケロちゃんとしては誰か通りかかって、都をどこか安全な場所に連れて行ってくれることを密かに望んでいたのですが、さくら達が目につきにくそうな場所に降りたこともあり、幸か不幸か誰にも気づかれることはありませんでした。

遠くの方で、さくらが魔法を使った気配がします。

さくらがどうなっているのか、気が気でなかったケロちゃん。ですが、さくらを信じてじっと待っていました。

「ケロちゃん!!」

「さくらか？」

上から呼びかけられると想像していたのに地上から呼びかけられたのでケロちゃんは驚きます。

「遅かったやないか」

「ごめんなさい。ケロちゃん、都さんは？」

「まだ氣い失つとる」

さくらが見ると、都はそこに横たえた時と同じようにベンチに横たえられていました。

「なら、病院かどこかに運ぼうよ」

「けどな…さくらがこれ、運ぶんか？」

「ケロちゃんが運んでくれないの？」

「見てみ」

ケロちゃんの視線を追うと、警官が何人か慌ただしく駆け抜けて行くところでした。

「あ…」

「そう言う事だ。ここに居ても、じきに誰かが見つけてくれる」

姿が見えないと思ったら、人に姿を見られないためでしょう。木の陰からユエの声がします。

人に姿を見られたくないのなら、雪兎の姿に戻れば良い。ケロちゃんがそう言いかけようと思いました。

「駄目だよ。寒くなって来たし、風邪引いちゃうかも」

そう言うつと、さくらは都の身体をよいしょ、と持ち上げました。都の背丈は160センチはありさくらよりも大分高く、結果、都の足を引きずりつつ進んで行くことになりました。

「ほええ。重い」

「さくら、そんなことせんでも人呼べば」

さくらの耳元でケロちゃんが囁きます。

「うん…だけど、そこまで運ぶ…の」

「雪兎に戻って僕が…」

人目も構わず、ユエが話しかけて来ました。

「ユエさんは、お兄ちゃんの所に戻って。あ！ ユエさん、ちよつとお願い」

さくらは立ち止まると、ユエに都を預けました。

きょとんとした表情を浮かべ、それでも言われるがままに都を支えます。

そしてさくらはさくらカードを取り出し、その名を口にします。

「力（POWER）！！」

*

カードで力持ちとなったさくらは、都を両手で軽々と抱き抱え、進んで行きました。

「あの…。すみません！」

小学生の小さな女の子が、高校生の女の子を持ち上げ運んでいる。その光景を見れば、普通の大人なら何があったのかと思うところですが、ジャンヌが出現して慌てているのか、遊園地の中の表通行に出て、近くの大人に声をかけてすらさくらに見向きもせず、走り去って行きました。

「あの、すみません」

「どうしました！？」

「この人が、倒れていたんです」

「間もなく、救急隊が来るはずだから、ここで待っていて下さい！
我々はコースターの乗客の救出に向かっている途中なので」

立ち止まってくれた警官も、そう言うのと走り去って行きました。

「何や何や！ 困った人を助けるのが警察官や無いんか！」

警官達が去ってから、ケロちゃんは怒りも露わに叫びます。

「仕方無いよ。ジェットコースターの方も大変みたいだよ」

「けどな……」

「待つて!!」

さくらが注意を即し、ケロちゃんは縫いぐるみに戻ります。

警官達が去ったのと反対の方角から、人影が歩いて来ていました。未だ停電は復旧しておらず、暗闇の中から歩いて来た人影が、自分と同じように誰かを抱えていることに気づきます。

そして近づくにつれ、その人影が自分の知っている人物であることにさくらは気づきました。

「まるんさん!？」

「え!？」

さくらが驚いたように言うと、人影も驚いたように立ち止まります。

「都さん……。あなた、助けてくれた人」

両手でまるんを抱えた人影は、まるんや都と同じ年位に見える少女。

浅黒い肌と赤い髪。日本人とは思えぬ少女の口から出たのは紛れもない日本語。

彼女の肌を見て一瞬躊躇したさくらでしたが、言葉が通じると知り安心して話しかけました。

「この人はそこに倒れていたんです。その人、まるんさんですよ?」

「うん、そう。都さんは倒れていた。そこで。…そう言う事なの」
一人呟き、背いている少女をさくらはきょとんと見つめます。

「あの…」

「失礼。…私の名前はアンよ。都さんを助けてくれて、ありがとう」

少女はそう名乗ると、さくらに向かってにっこりと微笑むのでした。

●大観覧車

さくら達が戦っている間、ずっと知世は観覧車のキャビンの中に閉じ込められたままでした。幸い、携帯電話は通じるようだったので、知世はボディーガードを呼び出し、事件の状況を聞きました。ボディーガードも入場出来ずに足止めを食っているらしいと聞き、知世は小狼も同様であろうと気付きます。それで、小狼を探すようお願いしました。

そうしている内に電源が回復し、大観覧車が動き出します。それとほぼ同時に、空から騒音が響いて来ました。

「これは…」

山茶花家の紋章をつけた大型ヘリコプターが、知世の目の前を飛行していました。弥白を救出に来たのだろうか。そう考えた知世。

「弥白様、どこですかー!!」

へりからスピーカーを通して少女の声が響き、知世の考えを肯定しました。

「（私も、そうして貰えば良かったかもしれませんわね）」

そんなことを考えたりしている内、観覧車は停止してから30分近い時を経て地上へと向かいつつありました。

「あ！！」

知世が小さく叫び声を上げたのは、観覧車が地上にもう少しで到着する時。

「（さくらちゃんが、戻っていませんわ）」

それだけではありません。キャビンの扉はさくらが「剣」のカードで壊したままなので、このままでは遊園地の係員、それ以前に下で心配しているであろう大和に不審がられてしまいます。

「どうしましょう…」

*

順次、地上に戻って来たキャビンの扉を開けていた遊園地の係員。中からは、乗客がよろめきつつ出て来ました。その中の或る者は、担架に乗せられ病院へと運ばれて行きます。彼の前に、少女が一人、乗っているキャビンが降りて来ました。

「？」

その少女——黒髪の美少女——を見て、彼の中にある疑問が浮かびます。

確か、このキャビンにはもう一人いたような…。

彼の疑問は、扉のロックを外そうとして確信に変わります。

ロックが壊されている。これは…。

「わああっ!!」

しかし、彼の思考は扉を開ける前に中から転がり出るように出て来た少女——知世——に抱きつかれたことにより中断されました。

「お客様、大丈夫ですか？　おい！」

別の係員に扉を開ける仕事を変わって貰い、その係員は知世を連れて、出口へと誘導します。

「大丈夫…ですわ」

「お客様、扉は一体…？」

「怪盗ジャンヌが通り過ぎた時、壊れてしまっ…。怖かったです…」

少女に泣きつかれ、それ以上のことを係員は聞くことが出来ませんでした。

そして思うことにしたのです。

もしこの子が他の少女と一緒に乗っていて、一緒に居た子がキャビンから落ちたなどの理由で居なくなっただとすれば、もっと大騒ぎするに違いない筈だと。

そして彼は気付くことはありません。

少女が、何とか上手く誤魔化すことが出来たと胸を撫で下ろしていることに。

● 救護所

さくらが都をアンがまるんをそれぞれ背負って、二人は遊園地で気分が悪くなったり怪我をした人のために設置されている救護所のある建物にたどり着きました。

アンはさくらに都も一緒に運ぶと提案したのですが、さくらは断ります。実際、「力」のカードを使ったさくらは、都どころかアンとまるんを同時に運ぶ位の力を有していたのです。

「ちよつと待つて」

建物の入り口。アンは立ち止まり目を閉じます。

どれ位そうしていたでしょうか。さくらが声をかけようとした時に、アンは目を開けました。

「さ、行きましょう」

アンはそう言うと、建物の扉を開けました。

この建物の案内を見る限り、迷子センターや託児所、案内所などが併設されている様子でしたが、怪盗ジャンヌが現れ避難した所為か、建物の中に人の気配はありません。正確には、さくら達が入って行こうとした時に、慌ただしく白衣やこの遊園地のスタッフの制服を着た人達は何人か、さくら達を見向きもせず慌ただしく建物を出て行ったのですが、この遊園地の状況を知るさくらはそれを疑問には感じませんでした。

「あ…」

しかし、建物の中に入った時にさくらは異様な空気を感じ取ります。

「（この匂い）」

それは、先程感じたのと同じ匂い。

「何か、匂いませんか？ 蜜柑みたいな匂い」

先を進むアンの背中にさくらは呼びかけました。

「何、匂い？」

振り返って、アンはくんと鼻を鳴らします。

「何も感じないわ」

「そう…かなあ？」

しかし、この匂いを嗅いでも、自分の身に何も起きません。

「（気のせいなのかな…？）」

そう思い、さくらは匂いを気にすることを止めるのでした。

● 大観覧車の近く

都をまろんと共に救護所のベッドに寝かせた後で、さくらは都とも知り合いであるらしいアンと名乗る少女に後のことをお願いして、大観覧車の方へと駆けて行きました。

ちなみにケロちゃんは元の縫いぐるみに戻り、ユエは雪鬼の姿に戻って、桃矢の所へと去って行きました。

既に遠くから見ても観覧車は動き始めていて、既に知世は地上に降り立っていいそうです。

どうやって誤魔化そうか。考えながら、さくらは駆けていたのですが、どうにも良い考えが思いつきません。

そんなさくらの頭の上を轟音を響かせ巨大なヘリが通り過ぎて行きます。

ヘリの下部には、どこかで見たような紋章が描かれていましたが、その紋章をさくらは知りません。

そうこうする内に観覧車にたどり着いたさくら。

すると向こうから、知世が小走りに駆けて来ました。

「知世ちゃん！」

「さくらちゃん！」

駆けて来た知世は、その勢いのままにひとさくらに抱きつかます。

その所為で、さくらは後ろに尻餅をついてしまい、自然、知世がさくらを押し倒した格好になってしまいます。

「きゃっ」

小さく悲鳴を上げるさくらの身体の感触を全身で感じつつ、このまま先に進めれば良いのと思った知世。しかし、次の瞬間には理性が欲望に対して勝利を収めていました。

「ごめんなさい」

そう言いながら立ち上がり、自分の服の埃を払う前に、さくらに
向かって手を差し伸べ、立ち上がらせました。

「大活躍でしたわね、さくらちゃん」

「知世ちゃんは大丈夫だった？」

「ええ。さくらちゃんの勇姿もしっかりビデオに収めましたわ」

そう言い、ビデオカメラを見せるとさくらは何時もの様にちよつ
と呆れた笑顔を見せました。それを知りつつも、これだけは止めら
れませんわと知世は心の中で何時も呟いているのですが。

「さくらちゃんはお手洗いに行っていたということにして下さい」
「え？」

小声で、さくらの耳元で知世は呟きました。

最初、戸惑ったさくらですが、向こうから水無月が歩いて来るの
に気づくと小さく肯きます。そして二人は手をつないで水無月の所
へと歩いて行くのでした。

パート6（後書き）

今回はちょっと時間が掛かりますが暇を見つけて仕事をしていきます。

じかいはさくらちゃんと小狼君が再会する話をします。
あと少しでフィナーレですね。

パート7（前書き）

大分時間が掛かりましたがやっとできました。

もつどの文章を写せば判らなかつたものですか。

今回はさくらちゃんと小狼君が再会するシーンをつけたいと思います。

パート7

●水無月ギャラクシーワールド・救護所

合流した水無月大和にさくらがまろんと都が救護所で寝かされていると伝えと、彼は慌てて先頭に立つて救護所へと向かいました。

「わあっ」

扉を開けると丁度アンがまろんの濡れた服を脱がしている最中でした。

最初に扉を開いた大和が小さく驚きの声を上げ、それに気づいた知世は前に回り込むと大和を部屋の外に押し出し扉を閉めてしまいます。

*

扉の外に取り残された大和とさくら。

さくらは中に入っても良さそうなものですが、何となく大和に悪い気がして外で待っていました。

暫くして、知世は紙袋を手にして部屋から出て来ました。まろん、そして都が寝かされているベッドはカーテンが引かれていて、中がどうなっているのかは判りません。

そして知世は携帯電話をどこかにかけました。

「もしもし、直ぐに遊園地の救護所に来て頂けますか？ 入り口は、水無月さんをお願いして通して頂けるようにしますの」

そう言うと、知世はクリーニングして欲しい衣類があること、そ

れとは別に持って来て欲しい物があることを手早く指示するのでした。

＊

知世が外に——お付きのボディガードさん達に——指示した内容。

それは、知世がまるんの個人情報をもとに作成した衣類一式でした。カーテンの中でまるんが着付けられていた時、悲鳴を上げていたのでどんな恥ずかしい服が出て来るのだろうかと気にしていたさくら。ですが、出て来たまるんの姿は、さくらでも着てみたいと思う様な純白ドレスでした。

「わああ」

小さく、さくらは声を上げました。

その様子はもちろん知世は見逃すはずありませんでした。

そして、ある重大なことをすっかり忘れていたことに気づきます。

●メリーゴーラウンド「ギャラクシーカルーセル」

まるんとのデートを続けたという都の願い。

その願いは遊園地の経営者の息子である大和によってささやかながらも叶えられました。

遊園地の片隅に昔からある遊園地マニアには有名ながらも一般客の人気はさっぱりの回転木馬を動かすという形によって。

そこには、それだけでは無くさくらを驚かせる出来事もあったのです。

もちろん、その舞台をセッティングしていた張本人が、ボディーガードを通じてこっそりと呼び出していたのですが。

「さくら」

「小狼君？」

さくらに声をかけたのは、私服姿に今日はそれ程寒くは無いというのに緑色のマフラーをつけていた小狼。

「（このマフラー……。私がプレゼントしたのだ！）」

そのマフラーの正体に気づいたさくらは、彼の気持ちを読み取り微かに頬を染めました。

その表情を見てちよつとだけ表情を曇らせた知世。しかし、さくら達はそれに気づくことはありません。

「遅くなって、すまない。大変なことになっていたらしいな」

「大丈夫だったから、気にしなくて良いよ。でもどうして？」

「私がお呼びしたんですわ」

呼びたくは無かったんですけど。

そう、心の中で呟きつつ知世は言いました。

「そうなんだ」

「ねえ、この子は誰？」

「李小狼君。学校のお友達なの！」

まろんの問いに、さくらは即答しました。

まろんは彼を値踏みするかのように眺め回すと、小狼は顔を真っ赤にしました。

その様子を見て、香港に出かけた時の姉達の玩具にされた小狼の姿をさくら達は思い出します。

「小狼君も来るなら、一緒に来れば良かったのに」

当然の疑問をさくらは口にしました。

「もちろん、さくらちゃんに驚いて頂くために決まっていますわ」
「……」と云うことだ。待ち合わせ時間通りについたんだが、ジャンヌが現れたとかで入場を規制されてしまい遅くなった」

そう言いながら、小狼は頬を染めていました。

「そうなんだ」

小狼の様子を不審に感じたものの、さくらは素直に肯きました。
きっと雰囲気を感じて気を効かせてくれたのでしょう。

まろんが小狼の前に進み出て言いました。

「ねえ、小狼君。遊園地は休園になっちゃったけど、このメリーゴーラウンドだけは動かして貰えることになったの。私達だけで乗るのも何だから、君も乗らない？ さくらちゃんと一緒に！」

「良いのか？」

「もちろん！」

「私はお二人の姿を撮影致しますわ」

ビデオカメラを手にして、知世が言いました。

回転木馬には、二人乗りの木馬と一人乗りの木馬がありました。
まろん達と同じように、小狼とさくらは二人乗りの木馬を選びま

した。

知世はというと、さくら達の背中を押しておいて自分はビデオカメラを構えています。それは何時ものことなので、さくらは苦笑しつつもカメラに目線を合わせました。精一杯、幸せそうな笑顔で。

音楽が鳴り始め、ゆつくりとメリーゴーラウンドが動き始めました。

楽しそうに回転木馬に乗っているさくらと小狼。その様子をビデオで撮影していた知世。

知世の側をさくら達が通り過ぎる度、さくら達はカメラの方を向いて笑顔を見せました。

さくらは心から、そして小狼はぎこちなく。

それに応えて知世も笑顔を見せつつカメラを構えていたのですが。

さくら達を追い続けているビデオカメラのファインダーが曇り、視界がぼやけました。

「（どう…して…ですの…）」

ファインダーから目を離し、知世は目をこしこしと擦りました。決して、さくらに涙を見せてはいけない。その一心で。

視界の隅に白い物が差し出されました。

それが自分の涙を見て大和が差し出したハンカチだと気づくと、知世は思わず彼のことを睨み付けてしまいます。恥ずかしさのあまりに。

*

「知世ちゃん、今度は一緒に乗ろうよ！」

木馬が回転を止め、降りて来たさくらは真っ直ぐ知世の所に駆け
てくるとそう言いました。

「私は……」

遠慮しますわ。そう言いかけた知世の腕を取り、さくらは有無を
言わず回転木馬へと誘います。やがて、再び回り始めた木馬。
知世の隣で無邪気にさくらは知世に微笑みかけていました。
一方で、さくら達を外で見ている小狼はむすっとした表情をして
います。

「知世ちゃん」

「はい？」

「今日は、ありがとう」

「いいえ」

背景音楽の中、そう言いさくらは微笑みます。
その微笑みに微笑みで返しながらも知世の心中はフクザツだった
のです。

● 友枝町・エリオルの館

リニユーアルオープンした遊園地で騒動が起きた時、その場に居
合わせ、こっそりとさくらに力を貸したエリオル。

その晩、彼と使い魔達が棲む館に客人がありました。

彼の名はノイン・クロード。彼とは直接面識はありませんが、エ
リオルの中にあるクロウ・リードの記憶が、彼を覚えていました。

ノインは、遊園地から立ち去ろうとしているエリオル達の前に姿

を現して、エリオルの前世であるクロウ・リードの名を呼んだのです。

クロウ・リードが生きていた頃、魔法を学びにクロウの元を訪れたノイン。

本来であれば弟子など取らないクロウですが、彼だけにそれを許したのは、彼が持ち込んだこの世界の何処にも無い魔法の品の数々。そして、世界中を放浪していたという彼の経験が、クロウの感心を呼んだからに他なりません。

もつとも、それだけでは彼の側に留まり、魔法を学ぶことを許されることはなかったでしょう。ノインがクロウの側に住む事を許されたのは、それよりもっと大きな理由があったのです。

「ここも、久しぶりですね」

「内装には手を入れているが、基本的にはあの頃と変えていない」

「その様ですね」

「何なら厨房も覗いてみるか？ 実を言うと、君の手料理を久しぶりに食べてみたいのだが。材料は冷蔵庫にあるものを適当に使って」

「……お茶にするのでは無かったですか？」

ノインはそう言いつつ頬をひくつかせています。

「もちろん後でお茶は飲む。私としては、クロウ・リードの料理人の料理を味わってみたい。記憶にはあるが、私は食べたことが無いのですね」

「奈久留もお茶の前にご飯で良い〜!!」

「料理人と言うよりは、食事当番と言った方が正確ですけどね。」

私の料理はクロウに教えて頂いたのですが、お忘れですか？」

「もちろん、覚えている。教えるとすぐに君は私より料理が上手

くなつた」

「そのお陰で、暫く便利な料理人としてこき使われましたがね」

「何なら、また家で料理人として使つてやつても良い」

「それは遠慮します」

苦笑いしつつ、ノインはエプロンをつけ、料理の支度を始めるのでした。

*

しばらくの時間が過ぎ、奈久留のお腹が鳴った頃に、ノインが作った遅めの夕食が食卓に並べられました。ご飯にメバルの煮付け、アサリのみそ汁に、小鉢と香の物という純和風の料理。

「流石はノイン。土地の食材を見事に調理するものだ」

エプロンをして食卓に食器を並べたノインに、エリオルは賞賛を惜しみませんでした。小さく拍手までしています。スピネルと奈久留もそれに同調して拍手していました。

「……一つ、伺つて宜しいでしょうか」

「この家の和食器には、薄く埃が積もっていました。この家の主人は、あまり和食を食べる習慣が無いようです。それなのに、冷蔵庫には和食の材料ばかり」

「今日は和食の気分だったのだ」

「それだけではありません。この家には二人と一匹しか住んでいないのに、何故か冷蔵庫の中には四匹の魚。他の材料も大凡四人分しかも、ご飯は既に炊いてあつた上にアサリは砂出しまでしてあつた」

「はい。魚は奈久留が買って来ました。エリオルが書いたメ

もの通りに買ったんだよ」

奈久留が、手を上げて言いました。
それを見て、少しだけエリオルの頬が動きます。

「今日の出来事は予定外だと言いませんでしたっけ。エリオル」
スピネルが、ジト目でエリオルのことを見ました。

「さて、そんな事を言ったかな。確かに今日、私の予定外の出来事が幾つか起こったのは事実だが」

すつとぼけた表情でエリオルが言うのを見て、ノインは悟ります。
今日、ここに自分が来ることが、予知されていたのだと。

クロウ・リードは自分の死期を正確に予知していたのだと、死後直ぐに、風の噂で聞いていたノイン。その魂を受け継ぐこのエリオルという少年は、同じように予知の力を持っているに違いない。
ひよっとしたら、あの遊園地で起きたことすら、彼の予定の内だったのかも。

そう気づくと、ノインは背筋が寒くなる思いがするのです。

「さあ、ご飯にしようか」

「は、はい」

みそ汁をお椀によそりつつ、この人とだけは敵対しないようにしよう。

そう、ノインは思うのです。

●水無月ギヤラクシーワールド・入退場門

さくらと何度か、メリーゴーラウンドで楽しんだ後、さくら達は大和の案内で出口へと向かいました。

入退場門では職員達が出て行く人一人一人に、何かの紙を配っていて、さくら達もそれを受け取ります。ここで、さくら達は大和と別れました。

「『スパ温泉桃栗優待券』だつて。今度、行こうよ知世ちゃん！」
「ええ、そうですね…」

微笑みを見せつつ、どこか元気が無い様子の知世。
そんな知世の表情を見て、やっぱり疲れたのだろうか。
さくらはそのような想いを抱きます。

「お嬢様」

知世達が出て来るのを待ち構えていたのでしょうか。
サングラスに黒服の女性達が並んで待ち構えていました。
その向こうには、リムジンとさくらの衣装を積んでいるであろう
ワゴン車が見えています。

「準備は？」
「出来ています」
「結構ですわ。さくらちゃん」
「ほえ？」
「こちらに」

知世は、さくらの手を取りワゴン車の方へと誘いました。
何だか、嫌な予感がしたさくら。

「知世ちゃん。今日は、もう……」
「バトルコスチュームではありませんわ」

小声で、知世はさくらに耳打ちします。

車外に残された小狼、そして大和。

やがてワゴン車が少し揺れ始め、中から笑い合うさくらと知世の
声がします。

そして。

「お待たせしました」

ワゴン車の扉が開き、先に知世が姿を現しました。

「さ、さくらちゃん」

知世に促され、続いてさくらも姿を現します。

「！」

「！」

さくらの姿は、既に闇一色に染まりつつあった闇に溶け込んでい
ました。

衣装の所々にあしらわれた白い部分を除いて。

それ程、さくらの着ていた衣装は黒かったのです。

それはまるんに着せた衣装——純白ドレス——とは対照的な代物。
小狼も大和も知りませんでした、それは黒色のゴシッククローリ
ー
夕風ドレス。

もちろん、小狼とのデートのために作ったドレスなどではありま
せん。

その目的のためなら、もう少し相応しいドレスも幾つか考えてありました。

それは純粹に、知世が自分の目で見て楽しむための服なのでした。もちろん、下着もそれに合わせてあります。

「何だか、恥ずかしいよ…。小狼君はどう思う？」

「その…素敵だ」

小声で小狼が呟くと、さくらは真っ赤になって俯きます。

「ささ、さくらちゃんと小狼さんはこちらに」

知世は、扉が開けられたリムジンの方にさくら達を誘います。

「ささ、どうぞ」

さくらと小狼をリムジンの中に招き入れた知世。

二人がリムジンの中に入ると、外から扉を閉めてしまいます。

リムジンは大きなもので、三人が横に並んで座っても余裕なばかりか、向かい合わせの席もあるタイプ。なので、驚いてさくらは扉を中から開けました。

「知世ちゃん？」

「どうぞ、これからはお二人でお楽しみ下さい」

「でも」

「私はこれから用事がありますので、後はお二人でデートを楽しんで来て下さい。レストランを予約してありますので。代金は先に支払い済みですし、お家まで送って貰うようにしてありますから、後のことは気になさらずに」

「そんな。代金まで支払って貰うなんて」

「ちょっと早いですけど、さくらちゃんへの私からの誕生日プレゼントですわ」

そう言いつつ、誕生日にも別途プレゼントを渡すつもりの知世です。

「でもでも」

「それでは、小狼さん。さくらちゃんのことを宜しく願いします」

そう言い、知世は扉を閉めました。

そして知世が手で合図すると、リムジンは予め予約していたレストランに向け、走り去って行くのでした。

「さくらちゃん…楽しんで来て下さいね」

リムジンの姿が見えなくなるまで、知世はその姿を追い続けているのでした。

● 濱坂市・中華街

「ほえ」

知世の家のリムジンで連れて行かれたのは、豪華な中華レストラン。

ボディーガードのお姉さんに押されるように二人で店内に入ると、店員が予約席へと案内してくれました。

程なく、二人の前に運ばれて来たのは、さくらのお年玉を全て使ったとしても支払えないような豪華な中華料理の数々でした。

香港に出かけた時にも、そこそこ豪華な中華料理を食べたつもりではいたのですが、今、目の前に運ばれるそれには及ばないような気がします。

「ねえ李君。本当にここ、知世ちゃんの支払いで良いのかな？」

小さな声で、さくらは前の席に座っている小狼に囁きました。

「大道寺の家は金持ちだからな」

それだけ、小狼は言いました。実のところ、小狼の実家、即ち李家もそれなりの資産を持っているので、持たされているクレジットカードでこの場の支払いをすることも出来ました。尤も、それをしてしまったら最後、この支払いの理由を母や姉達に追求されてしまうのは確実でしたが。

「（流石に言い訳出来ないな。さくらとデート…デート？）」

さくらが来るから、今日遊園地に行くことを承諾した小狼。しかしさくらと二人きりにされることはあまり想定していませんでした。

知世の計らいで、二人きりになった今。

そう言えばこれは所謂デートというものなのではと小狼は気付きます。

「（余計なことを）」

大きなお世話という気持ちが半分、そして残りの半分は知世への感謝。

その時の小狼の内心を大雑把に分析すると、そのようなものでし

た。

しかし、与えられた機会は大事にすべきだとも思います。
それでこの際、言ってしまうことにしました。

「さくら」

「ふぁい？ ひよつと待って」

意を決して小狼がさくらに呼びかけた時、さくらは丁度ふかひれと鮑のスープの中に入っていたふかひれの塊を口の中に入れていた所でした。

さくらがふかひれを飲み込むのを待つ間、小狼は月峰神社でさくらの「灯」(GLOW)のカードによる灯りの下、知世に言われた言葉を思い出していました。

「李君。李君は本当にお優しい方ですから、さくらちゃんを悲しませたく無いとお考えになるのは良く分かります。けれど、さくらちゃんは悲しいことをずっと悲しいまま抱えている方ではありませんわ。李くんがお気持ちを告げられても きっとその想いを受け止めてさくらちゃんらしい答えを返してくださると思います」

漸く、さくらはふかひれを食べ終え、「何？」と小狼に尋ねます。

「さくら」

「はい」

「俺はその、あの……」

決心したとはいえ、いざ切り出すとなると緊張して口ごもってしまっ
小狼。

その顔は既に真っ赤です。

その表情を見て、何となく察したのでしょうか。

さくらの顔まで赤くなっているような気がしました。

「俺は、お前が……」

「ぷはーっ！！ 良い匂いやな」

「ケロちゃん！」

それまで、さくらの鞆の中でじっとしていたケロちゃん。じっとしている様にとさくらはお願いしていたのですが、周囲から漂う極上の料理の匂いに、つい出て来てしまったようです。

「お、これはふかひれスープやな？ どれ、わいにも一口食わせてな」

「しょうがないなあ。出来るだけ、じっとしててね」

さくらはケロちゃんを自分の膝の上に乗せました。

そしてふかひれスープをレンゲですくいます。

それを口に近づけ息を吹きかけ少し冷ましてから、さくらはレンゲをケロちゃんの口に近づけると、ケロちゃんはそれを口にして美味しそうな表情を浮かべます。

その様子を眺めながら、あんな風に食べさせて貰えたら、料理もさぞや美味しかろう。そんなことを小狼は思っていた。そしてケロちゃんが居ることを思い出してしまった小狼は結局この夜、さくらに告白することは出来なかったのです。

● 水無月ギヤラクシーワールド・入退場門

さくら達を乗せたリムジンが去ってからしばらく、そのままそこで立ちつくしていた知世はやがて、ふらふらと残されたワゴン車に向けて歩いて行こうとしました。

その時です。向こうの方から車の急ブレーキの音が響き、扉が開く音がします。

「知世」

その物音に向け、警戒の姿勢を取るボディーガードの向こうから聞き慣れた声がありました。その声を聞き、ボディーガードの隊列が割れました。

「お母様？ どうして……」

向こうから歩いて来たのは、知世の母、園美。

心配そうな表情を浮かべ、向こうから小走りに駆けて来ると、知世のことを抱きしめました。

「知世、無事だったのね」

その言葉を聞き、遊園地での騒動の報告を聞いて仕事を放り出してやって来たのだと気付きました。自分の無事はボディーガードを通じて知っているだろうに、心配性なんだから。そう知世は思います。

「ええ。大丈夫ですわ。お母様」

「それで、さくらちゃんは？ 無事なの？」

知世から離れた園美は、周囲をきよろきよろと見回します。

園美にとってさくらは、愛しき撫子の娘。つまりは、自分の娘も同然の存在。

心配するのは当然でしょう。しかし、さくらはこの場にはもう居ません。そのことを知世は母に伝えました。

「そう…。さくらちゃんは本当に無事なのね」

「はい。お母様。今頃は、小狼さんと一緒に」

「ああ、あの李家の…」

「ええ。お似合いのお二人ですわ。本当に……」

笑顔で言ったつもりでしたが、母の前では感情を抑えることが出来ません。

自分と同じように唯一無二の親友を友情を超えて愛し、その想いを貫くことが出来なかったと聞く母の前では。

「ひつく…。えつく…」

娘の表情に気づくと園美は、ボディガードからその表情が見えないように、知世の前に壁を作るように立ちました。

そうして、園美は知世の身体を抱きしめます。

母の身体に包まれ、知世は声も立てずに泣き続けるのでした……。

パート7（後書き）

あと少しでフィナーレです。

最後はおまけをつけてみたいと思います。

小狼君の和服姿がアニメでみてみたいですな。

パート8（前書き）

あと少しでフィナーレが近づいてきます。

それにしてもセシルとトキは確か原作では天使の筈ですが小説では堕天使という設定になってしまいました。が私の気のせいでしょうか？

もしかしたら彼らは神様を裏切ったのかもしれませんが。もしそうならフィンいえジャンヌに封印されているでしょうね。

今回は本当に稚空くんは出番が殆どなかったですね。

それにフィンちゃんはどうしているのでしょうか？

パート8

●水無月ギヤラクシーワールド・大観覧車

その騒動の最中、弥白はジャンヌの戦う様子を見ていることしか出来ませんでした。

見ていたとは言え、距離と暗闇が邪魔をして結局は何が起こっているのか判らなくなってしまったのですが。

それでもツグミに比べればと弥白は思います。

戦いの音は度重なる雷鳴と上空を飛び回るヘリの騒音で打ち消されてしまい、盲目のツグミが外で起きている出来事を知る手段は、ただ弥白の言葉のみ。

宙づりになっているコースターを見下ろす形でジャンヌが浮いていること。

雷がコースターを何度も直撃していること。

大観覧車の前を何かが飛び去って行ったこと。

コースターが再び動き出し、停まったこと。

ジャンヌらしき影が空中に浮かんでいること。

もう一人のジャンヌの出現。

その後、二人のジャンヌの間で戦いが行われたらしいのですが、動きが速すぎた上に暗闇で何が起きているのか判らず、その内より遠くに戦場が移動してしまいました。

これらの状況を懸命に弥白はツグミに伝えました。

とても現実には起きていないとは思えない出来事をあっさりとツグミは受け入れていて、やはり彼女も色々と“知って”いるのだと弥白は確信します。

やがてジャンヌ達の戦いの場所が、大観覧車からコースを挟んだ

更に向こう側に位置する水平ループの方に移動すると、時折発生する閃光以外、最早何が起こっているのか判らなくなり、率直にそのことを弥白はツグミに告げました。

「日下部さん…」

暗闇に包まれたキャビンの中。

そうツグミが呟くのを弥白は聞きました。

手首に巻いた腕時計を見た弥白。

観覧車が停止してから、20分近く。未だ、助けが来る気配はありませんでした。

●……

「都！ 返事してよ都！」

コースターから海面に飛び込んだ後、漸くのことで海面に顔を出したまろん。

都の姿はどこにも見えず、まろんは都の落ちた方まで泳いで行くとしたものの、濡れた服が身体にまとわりついて中々思うように進めません。

時々、都に呼びかけてみます。しかし、返事はありません。

陸の方からはパトカーのサイレンとヘリコプターの騒音が鳴り響いていて、自分の声と、そしてもしかしたら助けを求めているかもしれない都の声をかき消しているような気がして、無性に腹が立ちました。

「！」

自分の周囲が突然光りました。しかし、その光が自分を覆い尽くすことはありません。

彼らが「神のバリヤー」と呼ぶ障壁は、その程度の攻撃程度ではびくともしません。しかし……。

まろんの周囲には、その攻撃の犠牲となっただけの魚がぷかぷかと浮いていました。そしてその中には、人間のような塊も浮いていたのです。慌てて、その人影に向かって泳いで行きました。

「都！」

都の髪に結ばれたリボン。見間違えようがありません。しかし、まろんはそれが都であると信じたくありませんでした。何故なら、都であるとは判らない程、それは黒焦げとなっていたから……。

● 魔界・王宮

その様子は、天界・魔界・人間界の各所で、複数の者により同時に目撃されていました。

魔王の王宮で、部下に命じて水晶球により人間界の様子を眺めていた魔界宰相——元人間——もその一人でした。ユキが神の御子を止めた様子を見て、宰相は呟きます。

「なんてこった」

それは、彼が久しぶりに使った人間界の言葉でした。

● 水無月ギョラクシーワールド

「都お！」

絶叫を上げ、少ししてまるんは気付きました。

自分が今いるのが春の海では無いことに。

視界には白い天井がありました。つまりは、自分は寝ていたらしい。

そう理解すると、かけられていた毛布を持ち上げ起き上がろうとしました。

「え…？ × …！！！」

声にならない悲鳴をまるんは上げました。

まるんは身に何も——下着すら——纏ってはいませんでした。一言で言うと、裸。念のため下半身も確かめてみると、そちらも同様でした。

「（な、なんで裸なの！？）」

慌てて毛布で自らの身体を覆ったまるんは周囲を見回しました。

幸い、周囲はカーテンに覆われていて、自分の裸を誰かに見られるということは無さそうでした。そう考えてまるんは気付きます。

今裸だということは、誰かが服を脱がしたのだということ。そして……。

「気が付きましたか」

カーテンの向こう側で誰かが動く気配がして、まるんが良く知る男の声がしました。

「その声…。ノイン？」

自分が魔界の者達に襲われた以上、この場にノインが居ることに驚きはありませんでした。何故、自分に手出しせず、ここに寝かせてくれているのかは謎でしたが。

「いえ、紫界堂聖です。日下部さん」

まろんに正体が明らかになっていくにも関わらず、聖はそう言いました。

紫界堂聖を知る誰かがこの場に居るんだ。

まなみ先輩の姿をまろんは思い浮かべます。

「ここはどこ？ 私、一体…」

「ここは遊園地の救護室です。あなたは遊園地に侵入した怪盗ジヤンヌがジェットコースターを破壊した騒動の最中に気を失った。そう聞いています」

聖の説明は、嘘は何一つ言っていないものの、肝心な点についてはぼかされている。そのような印象をまろんは受けました。

「私の服、どこ？」

「あなたは海水でずぶ濡れでした。風邪を引いてはいけないと言うので、申し訳ありませんが服は脱がさせて頂きました」

「…見たの？」

「違います！ 神に誓ってそれはありません。そもそも、服を脱がせたのは私ではありません」

かなり慌てた様子で、聖は言いました。
それを聞いて、まろんは笑います。

「何がおかしいのですか？」

「『神に誓って』って言う辺りが」

「それも、そうですね」

「それで、誰が私をここに？」

「私です。 まろんさん」

今度は女性の声がしました。

こちらでも聞き覚えのある声。 しかし、そのしゃべり方には未だ違和感がありました。

「アンなの？」

「はい」

「無事だったのね」

「気を失っちゃいましたけど。 ああ、服は後でクリーニングしてお返しします」

実は彼女は聖先生の知り合いだったのです。

そこまで気を遣ってくれるなら、ついでに代わりの服を着せてくれても良かったのと思ったまろん。 ですが、それより大切なことがあります。

「都は！ 都はどうなったの！？」

「都さんなら、救出されて無事です。 隣で寝てますよ」

それを聞いた途端、まろんはカーテンを開けました。 そこは、学校の保健室を大きくしたような部屋で、向こう側に同じようにカーテンに覆われた寝台がもう一つありました。 寝台と寝台の間には、パイプ椅子が置かれていて、そこにアンが座っていました。 聖はその後ろに立っていて、カーテンが開いた瞬間に自分に背を向けました。

まろんは毛布で身体を覆い立ち上がり、アンが止める間もなく隣の寝台のカーテンを開けました。

「都！」

寝台には都が横たわっていました。

それを見た瞬間、まろんは都のことを両手で抱きました。

両手で抱えていた毛布がずり落ち、露出した肌に都の身体が触れました。

暖かい。そしてまろんの耳には、都の寝息が聞こえました。

「…生きてる」

まろんの目からは止めどなく涙が溢れていて、身体を覆っていた毛布がずり落ちた姿でしたが、まろんはそれを直そうとはしませんでした。

まろんの格好をアンが気にして後ろを見ると、聖は相変わらず背中を向けていました。

●水無月ギヤラクシーワールド・中心部

時を追う毎に、遊園地内部の警官の数が増えて行きました。

墮天使・ミカサとユキは既に警備員の服から元の服に着替え、オープン初日から臨時休業を余儀なくされた遊園地から出て行く来園客の群れに紛れていました。もっとも、彼らは未だ遊園地を出る訳にはいかなかったのですが。

「第三猟兵中隊長から報告。人間達は警備センターを除き、撤収を完了したそうです。警察の相手をしているので、少し予定より遅

れているそうです」

携帯端末を操りながら、ユキは小声で言いました。
機械と心の声。その双方を駆使して、ユキは各所と連絡を取って
いました。

「トールン殿は？」

「アンが戻るまではこの場に留まるそうです」

「そうだろうね。天使達は？」

「どちらの方でしょう？」

ユキは、遊園地の外側に見える建物に視線をやりました。

「ああ。レイ達の方だ」

「本部の者を除き、空から全員撤収しました」

「ミナは？」

「一命は取り留めたそうです」

「それで、彼らの方は？」

「動き…ありません。龍族の者達が監視続行中」

「戦いは極力避けるようにと」

「了解。伝えます」

「魔族達は？」

「はい。天使の動向を見極めつつ、海の方から順次とあの御方シン様から」

「シン殿にはお疲れ様と」

「はい、伝えます」

「神の御子の様子は？」

「はい。東大寺都と一緒に救護室に寝ています。ミカサ様、これで良かったのでしょうか？」

ユキはミカサの方を見て言いました。

「悪くは無かったと思うよ。ユキもそれが良いと思ったのなら、それで良い」

「はい…」

「それよりユキ。身体の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫です。ミカサ様の側にいると、回復が早いんです」

そう言つと、ユキはミカサの腕に抱きつきます。

「お、おい」

「こうした方が、この場では目立ちません」

ユキがそう言つと、ミカサもそれ以上文句は言いませんでした。

●遊園地の近く

湾岸地区の再開発の中で建設されたマリアージュホテル。
その建物の屋上に、二人の天使が身を潜めていました。

「天使…でしたね」

小さな光球の一つが、そう言いました。

「まるんちゃんと戦っていたのは、レイちゃんとミナちゃんです
」！

その隣の光球が、それに応えます。

「あの二人、魔界に堕ちていましたか」

黒天使・アクセスが二人らしき者を見たという話を天使のトキは思い出します。

「天界を追い出されたら、消えるか、魔界に行くしか無いです」

自分が同じような立場に置かれたらどうするだろう。そう、天使・セルシアは思います。

「でも、どうして助けに行くのを止めたです。」

非難が含まれた口調で、セルシアはトキに尋ねます。

「この地は、魔族の気配で満ち溢れています。ここで我々が…」
「嘘です」

皆まで言わず、セルシアは断定しました。

「セルシア」

「まるんちゃんの様子が変わったからですか？」

セルシアが言うと、トキはため息をつきました。

「まるんさんは…神の御子は、我を失っていました。しかし、あれが真の神の御子の姿なのかもしれません」

「真の姿？」

「過去も、守るべき者のためにあなった御子がいたそうです。天界の機密文書にはそうありました。セルシアも読みましたよね？」

それを見たこともあり、二人は地上界に“飛ばされる”ことになったのですが。

「でも…まろんちゃんはそんなんじゃないんです！　一緒に住んでいたから知ってるです！」

「私も信じていた訳ではありません。しかし、これも現実です」

「トキ…」

「とにかく、今日は元に戻って良かった。しかし、次にあんなった時は…」

「まろんちゃんは絶対、大丈夫ですよ」

「私も、彼女のことを信じています。でも、万が一、彼女が彼女で無くなった時、私達が何をすべきか、判ってますね？」

「判ってる…です」

そう言いながら、俯いてしまったセルシア。

そんな彼女を見ながら、いざとなったら自分でやるしか無い。

そう、トキは感じていました。

「トキ」

「何ですか？」

セルシアに話しかけられ、トキは思いを見透かされたかと、ドキりします。

「まろんちゃんを元に戻した、あの子は一体、誰ですよ？」

「天使のように見えたが…判りません。彼女は一体、何者なのでしょう」

そう言ったものの、トキはある予想を立てていたのですが。

「…トキ！ また、何か来るです！」

セルシアが警告し、二人は屋上の片隅に身を隠します。
その屋上に、山茶花家で良く見かける服装を着た少女が着地します。

その少女をトキとセルシアは知っていました。

もっとも知り合いとは言え、挨拶をする間柄でも無いのですが。

「ちよつと濡れた位で役立たずか。人間の機械は使えない」

少女の身体からは水が滴っていました。

そう言つとその少女は、銀色の物体を投げ捨てました。

「ああ…、もう終わつちやつたかな。ノイン様、怒ってるかな…」

少女は遊園地の方を覗き込むような格好をしました。

「でもノイン様が“魔法使い”のこと、ちゃんと教えてくれなかったのが悪い。うん、そうに決まってる！」

そう決めつけると、少女は屋上から姿を消しました。

「彼女もいたんですね」

「“魔法使い”って何です？」

「さあ」

何だか判らない。そんな表情をトキは浮かべます。

「とにかくトキ」

「何ですか？」

「まるんちゃんと弥白ちゃんの様子を見に行くです」

そう言い残し、セルシアは一目散に遊園地へと向かいます。
セルシアの背中を慌ててトキは追いかけるのでした。

● 水無月ギャラクシーワールド・救護室

「アンさん……でしたね。彼女に、何か暖かい物を買って来てくれませんか？」

まるんが落ち着いた頃を見計らい、聖はそう言いました。
気を遣うくらいなら、自分で買いに行けば良いのに。
そう思い、まるんは聖——ノインの意図に気付きます。

「判りました。まるんさん」

アンはずり落ちたまるんの毛布を引き上げてくれました。
それで、自分の今の格好に気付いたまるんは慌てて毛布を手で押さえます。

「コーヒーで良いですか？」

「んと、ココアか何かがあると良いな」

「判りました」

そう言うと、聖からお金を受け取りアンは出て行きました。
寝ている都を別とすれば、救護室にはまるんと聖の二人だけ。
毛布を身体に巻き付けた姿で、まるんは都の寝ているベッドに腰掛けました。

「お礼は、言わないからね。ノイン」

状況から考えて、都を助けたのは魔界の者達に違いありませんでした。

何故、そんな親切をしてくれたのかは判りませんが、だからといって彼らを許す積もりはありません。

「お礼は期待していません。そもそも、彼女を助けたのは我々では無いのです」

「どういうこと？」

「その質問に答える前に、確認したいことがあります」

「私の質問に答えて」

「あなたは、あの戦いをどこまで覚えていますか？」

「え？」

「あなたは海に落ちた東大寺都を追って海に飛び込んだ。そこから先です」

「私は、海に飛び込んだ後で都を探した。そしたら、もう一人のジャンヌが私を攻撃して来て。それで…」

そこで、まろんは言葉に詰まりました。

その後のことについて、まろんは何も覚えていませんでした。

「その後のことは覚えていない。そうですね」

聖が言うと、まろんはこくりと肯きました。

「ノインはあの後のことを知っているの？」

「貴方はあの後、我々と戦ったのです。本当に覚えていないのですか？」

「でも…ロザリオはロッカーの中で。あ！」

言いかけ、まろんは慌てて口を閉ざします。

「ご安心を。あなたがロッカーに預けた荷物は、そこに」

聖が指さした方を見ると、まろんのバッグが置いてありました。そしてその隣には、都のバッグも。

「随分親切なのね」

「アンが持つて来たのです」

「そう…。それで、私が戦ったって？」

「我々の中で最強と言える戦士三名。――ああ、あの偽ジャンヌもその一人です――彼女達と正面から戦い、打ち破ったのです。その戦いが終わった後で、貴方は気を失って倒れました。我々は気を失った貴方をコースターの駅に置き去りにしました。その後、アンが貴方を見つけてここに運んで来たという訳です」

聖に説明されても、まろんには自分が経験したことには思えませんでした。とは言え、最強の戦士のうち二人が誰かは想像がつきます。あの黒髪と金髪の少女のことでしょう。

「私は説明したからね。今度はノインが教えてくれる番」

「東大寺都の方は、“魔法使い”の仕事ですよ」

「“魔法使い”？ それって…」

遊園地の中で会った少女のことをまろんは頭の中に浮かべます。彼女がかつて使った“魔法”のことも。

「あなたは一度、その魔法使いが魔法を使うのを見ている筈です」

友枝町のペンギン公園での出来事をノインは言っていました。

「ノインもあれ、見ていたの？」

「はい。ミストも一緒でした。彼女が、私達の前に現れるのは二回目です」

「それで、どうやって助けたの？」

「海面に落下する途中で、“魔法使い”が東大寺都を受け止めたのです」

「全然、気付かなかった……」

「戦いに夢中で、視界に入っていなかったのでしょう。だから、貴方が海に飛び込んだ時は驚きました。助かっているのに何故と」

ノインの説明を聞いて、まろんは気付いたことがありました。

「あの、もう一人のジャンヌはそのこと、知ってたの？」

「もちろん。“心の声”で伝えていましたよ。そうで無ければ、あんな派手な攻撃は出来ません」

あのもう一人のジャンヌは、都が無事だと知っていた。

だから、巻き添えを気にせず攻撃を仕掛けてきたんだ。

少しだけ、まろんはもう一人に対する怒りを収めました。
少しだけです。

「今日の戦いで判ったことがあります」

「何？」

「やはり、あなたはクイーンの……フィンの勧めに従うべきなのかもしれない」

「知ってるの？」

「フィンから聞いています」

「でもどうして？」

「この前の戦いの時、警告した筈です。あなたが我々に敵対する限り、我々は戦いを止めないと。そして、その結果がどうなるか」

「……」

「誰も、いなくなります」

「誰も…いなくなる。独りぼっち」

無意識に、その言葉が出てしまいました。

「ノイン達が、私を襲わなければ戦いなんて起こらないじゃない」
「私達が望まなくても、あなた方が戦いを望むかもしれないのです」

「それは…」

聖に反論しようとしたまろん。しかし、例えばセルシアに悪魔を封印するように依頼されたら、断ることが出来るだろうか？そう考えると、明快に否定することが出来ません。

「私が魔界に行ったからって、戦いが無くなるとは限らないよ？」
「少なくとも、貴方の側にいて戦いを煽る者だけはいなくなります」

「今日みたいなことが、又起きないとも…」

「その時は、必ず私達が抑えます。例え犠牲を払うことになって
も」

「そうまでしてどうして…」

「あなたに不幸な最後を迎えさせたくないからですよ。まろん」
「え…？」

気がつくと、聖はノインの姿になっていました。
ノインはまろんの前に跪き、右手を取りました。

「な…！」

ノインの手を振り払おうとしたまろん。しかし、ノインは強引に折り曲げていたまろんの手を伸ばすと、その手の甲に口づけました。

「今日は失礼します。…が、最後に一つだけ言わせて下さい。もしも、貴方が貴方で無くなったとするならば」

「私が…私でなくなる？」

「その時は、この世界に貴方の居場所は無くなることでしょう」

「私の…居場所…無くなる？」

「フィンの言葉を良く考えることです」

ノインがそう言うのと室内に風が巻き起こりました。

まろんの解けた髪が風に舞って視界を奪い、再びまろんの視界が開けた時、ノインはもうそこにはありませんでした。

「私、夢見てたの？先生がノインになるなんて…。」

●水無月ギヤラクシーワールド・大観覧車

観覧車が停止してから30分近くの後。

ジャンヌの動向が判らなくなってから、弥白とツグミは黙ったままでした。

何かを恐れてでもいるように。

ツグミの盲導犬・イカロスはもちろん、音一つ出しません。

「あ…」

観覧車に灯りが点った気配がして、キャビンが動き始めました。遊園地の停電も回復したらしく、各所に灯りが点り始めたものの、

ジャンヌが飛び回っていたジェットコースター・『ネプトウヌス』
だけには灯りが点っていませんでした。戦いの中で、コースの各所
が崩落したからでしょう。

弥白は、これだけのことをツグミに説明してくれました。

「少し、遅かったですわね」

弥白がぼつりと呟くのをツグミは聞きました。

それまで周囲を飛び回っていたヘリコプターとは明らかに異なる
エンジン音が先程から近づいて来ていました。

これと同じ音をツグミは聞いたことがあります。

軍用機のみが発することの出来る、重厚なエンジン音。

「こんなもので、貴方の家では持っているのね」

呆れたという口調でツグミは言いました。

「弥白様〜！！ どこですか〜！？」

キャビンの外からスピーカーを通じた少女の声が聞こえます。

「椿さん。まさか、あなたが」

その少女の名を弥白は口にします。

「私はここですわ！」

弥白が叫び、ぶんぶんと手を振る気配がしました。

ヘリはキャビンの近くまで接近し、弥白の無事を確認したのでし
よう。やがて、離れて行きました。

「ツグミさん、ツグミさん。無事ですか？」

か細い声が、ツグミの耳に届いたのはヘリの轟音がやや小さくなった頃。

ツグミの耳元の辺りで少女の声がツグミに呼びかけていました。

「なあに、セルシア。私は大丈夫よ」

同じ位、小さな声でツグミは囁きました。

向こうに聞こえているかどうかは判りませんが、気付いたことを理解して貰えれば、それで十分なはずです。

「弥白さんは無事ですか？」

「ええ。大丈夫」

ツグミは肯きつつ言いました。

「良かったです。それじゃ、今度はまるんちゃんの様子を見に行くです。」

「日下部さんはどうなったの!？」

「生きてるです…多分。あっちの方に運ばれて行っただす。」

「あっちって?」

「事務所のある方角です。救護室に運ばれて行っただものと」

こちらも良く知る声がしました。

「トキもいるの?」

「はい。そういう訳ですので、弥白嬢のことはお任せします」

「判ったわ。日下部さんのことは、お願い」

ツグミがそう言うと、二つの小さな気配はたちどころに消えて無くなりました。

*

ツグミは誰かと話している様子でした。

薄ぼんやりと、二つの小さな光が窓の外に見えました。

その気配は、ここ最近自分につきまとっているのと同じもの。

そう、弥白には思えます。

ツグミは小声で話しているので、その内容の全ては判りませんが、まるんの安否について話している様子でした。

その様子から、どうやらまるんも無事だったらしいと知り、弥白は安堵します。もっともその直後に、どうしてまるんの無事を喜ばなければならぬのかと心の中で叫んでもいたのですが。

十数分が経過し、観覧車のキャabinは一時間近い時を経て地上に到達しました。

続いて、全や佳奈子の乗ったキャabinも地上に到着します。

全はキャabinから飛び出て駆け寄ると、ツグミの名を呼びながら彼女に抱きつきます。

その目からは涙まで流していたところを見ると、余程心配だったのでしょうか。

「弥白様！」

遅れて、同行者の女性・佳奈子も弥白の名を呼びながら小走りにやって来ました。

佳奈子は弥白の前に立ちました。

「？」

佳奈子は横目でツグミ達の様子を見て、そして弥白に抱きついて来ました。

「弥白様あ」

肩を震わせ、弥白の胸に顔を埋めた佳奈子。

そんな佳奈子の頭をよしよしという風に、弥白は頭を撫でてやりました。

「大道寺さぁん」

間の抜けた、それでいて良く知っている声がして、弥白は手を止めました。

声のした方を見ると、知世達に置き去りにされた形となっていた、水無月大和が大道寺知世を出迎えていました。

「（そう言えば！）」

弥白は思い出します。

ツグミには話していませんが、彼女のいたキャビンから、一緒にいた少女が空に飛び上がって行ったことを。

「あの、木之本さんは……」

「化粧室に行ってますわ」

「え？ でも……」

「すぐに戻って来ると思いますわ」

何だか納得がいかない。

そんな表情を浮かべ、大和は辺りをきょろきょろと見回していました。

「その前に、私も化粧室に行きますね」

知世はそう言うと、本当に化粧室の方へと走って行きました。

「弥白様？」

自分の胸元から声がしました。

視線を戻すと、佳奈子が恨みがましそうな目で自分を見ていました。

何だか悪い気がして、再び弥白は佳奈子の頭を撫でてやりました。再度、佳奈子は顔を弥白の胸に埋めます。

しかし、そんな状態は長くは続きませんでした。

「弥白様……!!」

その声を聞き、弥白は佳奈子を少し強引に引き剥がしました。

「あつ……」

「弥白様、ご無事でしたか……!?」

駆け寄って来た同行者の少女・椿を見て、弥白は目を丸くします。使用人の制服——俗に言うメイド服——の上に、プロテクターだの、暗視装置だのを装着した姿で椿が走って来ました。流石に銃までは装備していませんが。

「随分大げさな格好ね。椿」

「弥白様からメールを頂いた後で、怪盗ジャンヌが遊園地で破壊活動を行っている」とニュースで流れたものですから」

そう言いつと、椿は佳奈子がしたのと同じように、弥白に抱きつきました。

椿がごてごてと身につけている装備品が当たって痛かった弥白。もちろん、そのことを弥白は口にせず、椿の背中に手を回してしっかりと抱き寄せてやります。

その様子を羨ましそうに佳奈子が見ていましたが、取りあえずそれは見なかったことにして。

●救護室

ノインが去った後、まろんは座ったまま俯いていました。考えれば考える程、判らないことばかり。

自分が今、ここで生きていることがそんなにいけないことなのか。そう思つと、涙が溢れてきそうでした。

もつとも、溢れそうになるだけで、涙は流れません。何時もの事ながら、そんな自分が嫌にもなります。

「ねえ都。私、どうしたら良いんだろう？ 聖先生がノインだといふのは夢として・・・。」

未だ眠り続ける都にまろんは語りかけました。

「お待たせしました」

引き戸が開く音がして、アンの声がしました。そう言えば、暖かい飲み物を買いに出かけていたのだとまろんは

思い出します。

時計を見上げます。

午後7時近く。ジェットコースター・ネプトウヌスに乗り込んだのは6時前だったので、あれから1時間程しか経っていませんでした。

「失礼します」

「失礼します」

アンに続いて、別の女の子と少年の声がしました。
女の子の方は二人いるようです。

「あなた達…」

「こんばんわ。まるんさん」

「こ、こんばんわ」

長い黒髪の少女と、やや茶色がかった短い髪の少女が、アンの背中からひよいと姿を現して、ぺこりと頭を下げました。

「さくらちゃんと…知世ちゃん？」

「良かったですわ。ご無事で・・・。」

さつき、彼女達はまるんが倒れたことを知っているのです。

「日下部さん！ 大丈夫ですか!!」

少女達の更に後ろから（当然、姿は前から見えていましたが）、大和が声をかけました。

何故か視線を逸らしていたのを不審に感じたまるん。
直ぐに、その意味に気付いてそのことを気にするのを止めて言い

ました。

「ありがとう。委員長。都も無事だよ」

「良かった。まさか、あのコースターに乗り合わせていたなんて。本当なら真っ先に駆けつけるべきなのに。僕は…僕は」

一人で馬鹿馬鹿と自分を大和は殴り続けていました。

「そんなに気にしなくても良いよ。委員長はこの子達のこと見てなくちゃいけなかったんだし」

まろんは、さくらと知世の方を見て言いました。

「そうですね。私達、観覧車に閉じ込められていて、水無月さんは下で待っていてくれましたの」

「何とか復旧させようとしたんですけど、何も出来なくて…」

がつくりと、大和はうなだれます。が、急に立ち直って言いました。

「そうだ！ 山茶花さんとツグミさんも観覧車に閉じ込められ…」

「無事なの！？」

もの凄い勢いで、まろんは聞きました。

「無、無事です…。山茶花さん、へりを呼んでたんで、今頃はもう…」

「そう…」

お見舞いに来てくれるかとちょっとだけ期待したまろんは、少し

落ち込みました。もっとも見舞いに来たら来たで、都の機嫌が悪くなりそうですが。

それはさておき、まろんには言わなければならないことがあります。

「あの…」

さくらと言う少女が、都を助けてくれた“魔法使い”。

ノインの言葉が真実ならば、さくらこそが都の命の恩人の筈でした。

でも、大和達がいることでそれを口にして良いものだろうか？
やはり人には言えない仕事をしているまろんは口ごもります。
すると黒髪の少女——知世——がまろんの側に寄って来ました。
そして膝を屈め、耳元でこう囁きました。

「お友達が無事で良かったですわね。まろんさん」

「あの、その…」

ありがとう。

まろんがその一言を言う前に、知世は指をまろんの口の前に立てました。

アンの視線を自らの身体で隠しながら。
気がつけば、さくらの方も知世の後ろまで来ていました。
まろんはそちらの方に顔を向けました。

「（ありがとう）」

声には出さず、只無言で肯いたまろん。

それだけで、さくらには通じたようでした。

さくらもまろんと同じように肯いて、そして笑顔を見せました。

そんなまろん達の様子を不思議な顔をして大和は見ていました。

「そうですわ!」

突然、知世が大声を出し、驚いたまろんはびっくりとします。

「な、何…」

「まろんさん、服が濡れてしまわれたとか。アンさんに聞きましたわ」

「え、ええ…」

「安心して下さいな。まろんさんの服なら、用意してありますわ」

そう言うとき知世は笑顔を見せました。

「へっ!？」

まろんは何だかもの凄く悪い予感がしました。

「お願いします」

知世が手を叩くと、「失礼します」と声がして黒服を着てサングラスをかけた女性は何人も入って来ました。

「例のもの、持って来て下さいました？」

「はい。こちらに」

黒服の女性達の中に箱の入っている紙袋を幾つも手にしていました。

「あの…それは？」

「もちろん、まるんさんの衣装ですわ！」

「えええゝ!？」

「大丈夫ですわ。今度はちゃんと作っていますから！ あ、もちろん下着も私のオリジナルデザインですわ」

“今度は” “作る”

知世の言葉の一つ一つに、まるんは何かひっかかりを覚えます。

「知世ちゃん、大丈夫なの？」

ややジト目で、さくらが知世にこう言うので、まるんの懸念はますます高まっていきました。

「大丈夫ですわ。さくらちゃんの見解もちゃんと取り入れてますもの」

「私の意見？」

「くまさんのプリントパンツは止めましたわ」

「と、知世ちゃん」

恥ずかしげも無く知世が言うので、まるんはずっこけました。大和はと言うと顔を真っ赤にしている、アンは逆に意味が判らないのかきょとんとしています。

「くまさんパンツ…ああ、そう言えばあんたそんなの昔つけていたわね」

背後から声がして、まるんは飛び上がりました。

「都？ …都！」

まろんが振り返ると、寝台の上で都が起き上がろうとしていました。

それを見た瞬間、まろんは再び都に抱きつきます。勢い余って、そのまま押し倒してしまいます。

「ちよつと、まろん」

ちよつと吃驚した表情を見せた都。

しかし、まろんの格好と表情から事態を察したらしく、それ以上は何も言いませんでした。その代わり、手を伸ばしまろんの髪を撫でました。

「大丈夫？ どこか痛いところ無い？」

「別にどこも…強いて言えば」

「どこ！？ 早くお医者さんに…」

「暑苦しいし恥ずかしいから離して欲しいんだけど」

その時の都は下着姿——服は、ベッドの脇にかけてありました——で、自分自身は毛布を巻いているとはいえ裸。

見た目だけであれば、妖しい光景には違いありません。視線を感じてまろんが振り返ると、知世達が真っ赤な表情をしてこちらを見ていて、慌ててまろんはベッドから離れました。

「お友達の方も気がついたところですし、まろんさん」

真っ赤になっているまろんの手を取り、知世は言いました。

「裸のままでは風邪を引いてしまいますわ。是非、着替えを」

「え、でも…」

「まろんさんはさくらちゃんの命の恩人ですもの！ 服なら何着

でも差し上げますわ！」

「恩人？ 何で…私が？」

「それでは皆さん、お願いしますわ」

そう言い、部屋の隅で待機していた黒服美人に知世は合図をします。

すると黒服達は「失礼します」との言葉とは裏腹に強引にまろんを彼女が寝ていたベッドに連れて行き、カーテンを閉めました。

「ああっ。まろんさんの着替えた姿が楽しみですわあ。ああ…目が眩が…」

「知世ちゃん」

直後、カーテンで隠されたベッドから、まろんの悲鳴が響き渡りました。

パート8（後書き）

あと少しでフィナーレが来ます。

さくらちゃんは果たして悪魔をアイはらうことではなく追い払うことが出来るのでしょうか？

この小説でさくらちゃんは矢のカードをさくらカードアローに変えることができました。さくらちゃん頑張りましたね。

パート9（前書き）

今日は特別におまけをつけて生きたいと思います。

最後は稚空くんとアクセスが登場します。

2人で話をしてしまいます。

今回はジャンヌキャラが多かったですね。

おしまいにも前回、さくらちゃんが小狼くんとデートをしてしまいましたね。

パート9

●マリアージュホテル濱坂

ホテルの宿泊とセットで予約されていたホテルの中のレストランで、フランス料理のコースに舌鼓を打ったまるん達。

流石にラウンジでカクテルを…という年齢でも無かったので、予めチェックインを済ませてあったホテルの部屋に直行となりました。

都が予約していた部屋は、スイートルームという程ではありませんが、日本のホテルにしてはそれなりに広い部屋。
ベッドが二つあるのを見て、何故かまるんはほっとします。

「今日は、楽しかったね。途中でジャンヌが現れたのを除けば、
だけど」

部屋の窓側にあるソファに腰を落ち着け、まるんは言いました。

「そうね」

都は、部屋の中を見回しながら言いました。

荷物を下ろし、上着を脱いだ都はまるんの前に腰を下ろします。

それきり、何も言わなかった都。

何か話をしなくちゃ。

そんなプレッシャーを感じる関係でも無いので、まるんはテレビを点けました。

すると、もう一人の自分の顔がテレビに映っていました。

“昨日の枇杷高校に引き続き、今日は開園したばかりの遊園地で、

怪盗ジャンヌが大暴れです” “本日午後5時45分頃、怪盗ジャンヌが濱坂市の「海の聖母マリア」教会に出現しました。怪盗ジャンヌからの予告状を受け、待機していた警察の活躍により、ジャンヌは何も盗まずに逃走。ジャンヌは現場に隣接して本日オープンした遊園地、水無月ギヤラクシーワールド内に侵入。ジェットコースター『ネプトウヌ』を破壊しました”

ちょっと待って。枇杷高校に引き続き？

まろんは思わず驚愕の表情を浮かべかけ、それを抑えます。

そこで事件が起きていたのは事実ですが、まろんは怪盗ジャンヌとして活動はしていません。しかし、そちらの事件の方は残念ながらテレビでは報じてはくれず、後で調べるしか無さそうでした。都の方を見ると、あまり関心が無さそうに見えます。

“では、現場の橋本より中継です”

“水無月ギヤラクシーワールドのジェットコースター『ネプトウヌ』です！ コースの各所が崩落しているのが見えますでしょう。警察の発表では、怪盗ジャンヌが破壊したとのことです。ジャンヌが出現した時、走行中のコースターが取り残され、一時現場は騒然となったそうです。乗り合わせた目撃者の方にもインタビューしていますので、まずはこちらをご覧ください”

そう言えば、目撃者なのに何も言わずに帰ってしまって良かったのだろうか。

そんなことをまろんは考えました。

もつとも、事情聴取を受けても何を話して良いのか困ってしまいますが。

「あ、アンだ」

「え!？」

慌ててテレビを観ると、アンが流暢な日本語でインタビューに答えていました。

帰るとか言っていたけど、途中でテレビ局に捕まっていたんだろ
うか。

そう、まろんは思います。

アンの証言は、ジャンヌが現れてからすぐに気を失っていたという
ものでした。

その証言を聞いて、まろんは気が付きます。

そう言えば、都はどこまでこの事件のことを覚えているんだろう。
偽物のジャンヌが私の名前を呼んだのを都は聞いていた。

それに、あわや海に転落死しかけた。

なのに、どうしてそのことを都は言わないのだろう。

誰か、記憶を消してくれたのだろうか？

確かめなければならない。

そう思いつつ確かめていなかったことをまろんは思い出します。

「あのさ」

「つまんないわね」

まろんが都に声をかけようとした時。

都はリモコンを手にしてテレビを消しました。

都会の喧噪は窓で遮られていて、部屋を静寂が包みます。

「そ、そうだね」

そうだ。取りあえず今は嫌なことは考えないようにしよう。
都のことは、明日さり気なく聞けば良い。

「ちょっと早いけど、もう寝ようか。都、先にお風呂に入ってたらず？」

何気なく、まろんは言いました。
すると、都はまろんを睨みました。

「え？」

何か拙い事を言ったのだろうか。まろんはちょっと慌てます。
都は立ち上がり、まろんの肩に手を置きました。

「嫌だったら嫌って言つてよね。遠慮する仲じゃ無いんだし」

そう言つと、都はまろんに顔を近づけます。

何も言わず、目を閉じたまろん。

最初はそつと。

次は強く。

最後は絡み付くように。

息苦しくなるまで、二人はそのままでした。

*

「なー稚空」

「何だ、アクセス？」

「俺たち、何時までこうしていれば良いんだ？」

「明日の朝、まろん達がここをチェックアウトするまで」

「えー」

先程までセルシア達が身を潜めていたホテルの屋上。

そこに今度は、稚空——シンドバットの姿ですが——とアクセスが身を潜めていました。

弥白からのメールにより怪盗ジャンヌの出現を知り、大慌てで遊園地に向かった稚空でしたが、電車で現場近くに到着した時には既に事件は終わった後。

その時になつて漸く連絡が取れたトキとセルシアと合流した稚空。続いて彼らの前に、アクセスが姿を現しました。土まみれの姿で、どうしてそんな姿になったのか、稚空達はあえて尋ねませんでした。

アクセスもその事には触れたくないらしく、何も話しませんでした。

へりに乗って屋敷に帰る弥白の護衛をセルシア達に任せ、まるん達を影ながら護衛することにした稚空達。

近くのホテルに向かった時には食事でもするのだろうと思つていると、終電の時間はまだ先なのに、二人はチェックインの手続きをしていました。

仕方無く、この場でまるん達を護衛すべく留まっていたのですが……。

「二人は今頃、何してるんだろうな」

アクセスが言いました。

「風呂入って寝てんじゃないの？」

興味ない。そんな態度を見せつつ稚空は言いました。

「お楽しみの最中かもしれないぜ」

「二人はただの幼なじみ」

「幼なじみ、ねえ」
「何だよ」

稚空を見つめ、アクセスは意味ありげな顔を見せます。
思い当たる節があった稚空は目を逸らします。

「まろんは性別気にしないみたいだし」
「邪魔でもさせたいのか？」
「気にならないのかよ」
「気にならない。…と言えば嘘になるがな」

稚空は立ち上がり、屋上の端まで歩いて行きました。
その後を小さな光球が追いかけて行きます。

「あいつは…弱い奴だからな」

夜の街を眺めつつ、稚空は呟きました。

「まろんが？」

アクセスの言葉に、稚空は肯きます。

「寂しいから、自分に向けられた好意を決して完全に拒めない。
だから、アクセスの依頼なんか簡単だ。最初はそう思った」

シンドバットの姿をしていた稚空は、口を覆うマスクを外しました。
た。

「なら、何で愚図愚図してたんだよ」
「怖くなった」

「え？」

「一度手に入れた愛情は決して手放さない。そう思えたからさ。それでいて、その愛を心から信じる事が出来ないらしい」

稚空の言葉の意味が判らない。

アクセスの表情を見て、稚空はそう思いました。

「俺のことも信じて貰えないと思ったのさ。だから、一歩引いてみた」

「逆に一歩前に出て、信じさせれば良いだろう」

「お前なら、そうだろうな。だが、俺はアクセスみたいに強気ではいられない。あの親父の息子だぞ、俺は」

「知ってる。だけど…」

このままじゃまるんを誰かに取られちゃうぜ。

続く言葉をアクセスは飲み込みました。

最後にまるんをモノにするのは自分だ。

そうとでも言いたげに、稚空の表情は自信に満ちていました。

*

「ほほう」

「あまりじろじろ見ないでよ」

ベッド脇の照明だけで照らされたホテルの部屋。

上から下まで眺め回す都の視線に耐えきれず、まるんは言いました。

「これ、あの知世って娘がデザインしたのよね」

「無理矢理着せるんだもん」

「こんなのも作る事が出来るんだ」

「こんなのも？」

「ほら、あのクマさんパンツ」

「（ギクツとして）知世ちゃんも言ってたけど、何よそれ」

「まろん、以前つけてたじゃない。覚えてないの？」

「だから何よ」

「去年の春に、西伊豆で大波が来たじゃない？」

「そそそそ・・・そうだっけ」

確かに彼女はその大津波のあった西伊豆でさくらたちと波を封印したのです。
ウェイフ

「何言ってたんだか。まろん、その大波を見物に行ってたじゃない」

「え？」

「それで波被って濡れちゃって、帰りはピンクの服にミニスカ―トって恥ずかしい格好で…。それで、下着もクマ…ぷぷっ」

堪えきれず、思い出し笑いをしてしまう都。

「何よ、それ！」

「あの服、一体どんな店で売ってたんだろうと思ってたけど、知世って娘が作ったんでしょ？」

流石のまろんは顔を真っ赤にしました。

「このことは稚空のスケベには秘密よ……。」

「わ～ってる。わ～ってるって～～！」

都はあのときのことを思い出してはくすくすと笑ってしまいました。

＊

胸に手を当て、まろんは何かを呟きました。

そんなまろんの様子をきょとんとした表情で都は見つめます。するとまろんは突然、ぶるつと身体を震わせました。

「寒い？」

「うん。ちよつとだけ」

「暖めてあげる」

都はまろんの身体に触れました。

掌から、まろんの鼓動と、そして微かな震えを感じ取ることが出来ます。

「怖いのか？」

都は聞きました。

その言葉に、不安が混じっているのが自分でも判ります。

「うん。怖いよ」

「嫌？」

「違うの。何と言ったら良いのかな。明日になったら、もうそれまでの幼なじみではいられない気がする」

都は、まろんから手を離します。

まろんは、不安そうな目で都を見ました。

それに気づき、都はまろんの頬に。続いて髪に手を触れました。

まろんを安心させるように。

そして言いました。

「明日になつても何も変わらないよ、まるん。変わりたくないから、触りたいの。あたしは心だけなんて嫌」

まるんは返事の代わりにこくりと肯きます。

それを確認し、都はまるんから手を離しました。

ベッドの上に膝立ちになり、改めてまるんを上から下まで眺めます。

レースたつぷりのブラにショーツ。そしてガーターベルト。

スリップ姿の自分とまるんの姿を見比べ、微かに劣等感を感じます。

都の視線を感じたのか、手を前にやっただまるん。

その手を取り、都は自分の方へとまるんを誘うのでした。

●魔界

宰相の報告は結局、フィン達が眺めていたのと同じ内容でした。

とは言え、ただそれだけを言うために彼がここに来た訳では無く、幾つかの報告を魔王に対して成し、幾つかの書類と荷物を置きました。

それらは宰相では判断が付きかねる微妙な問題で、魔王はそれぞれに指示を出しました。

最後になって、例のお客様が今夜にも到着されますと宰相は告げました。

「何故最初にそれを言わない」

少しだけ、怒気が混じった声で魔王は言つと、宰相は恐縮したという感じで頭を下げ、そそくさと去って行きました。

「さて、地上はどうなっているかな」

宰相が訪れている間、地上の様子を眺めていなかった魔王は、改めてまるんの様子を伺います。

「ほう」

「（良かったね。都）」

二人の様子を見て、フィンは心の中でそう呟きました。
続けて、映像を消すように魔王に願います。

「浮気の現場を見るのは辛いかな、フィン」

願い通り映像を消した魔王は、フィンに聞きました。

「いいえ。ただ、親友同士の二人だけの時間を大切にしておあげたいと」

「そうか」

「一つ、お聞きしたい事があります」

この機会を逃せば二度と聞くことは出来ない。

そう思い、かねてよりの疑問をフィンは聞きました。

「何かな」

「神の御子は乙女で無ければその力を失う。そう魔王様は仰いました」

「そんな事を言っただけかな」

「仰いました。女同士とは言え、次々と愛を育むまるんは、それでも力を失うことはありません。むしろ、強まる一方です」

「そうだね」

「仮にこれから乙女で無くなったとして、力を失うことはあるのでしょうか？」

「あのように乱れた生活を送った御子など、記憶に無いな」

また、からかわれているのだろうか。

そう思い、魔王の心を覗き見ようとしたフィン。

もちろん、彼の心の中を覗くことなど出来ません。闇が深すぎて。突然、突拍子もない考えがフィンに浮かびました。

「魔王様。かつて、神と交わり子を成した御子がいたという話ですが……」

「ああ、いたね」

「まさかとは思うのですが、乙女のまま、彼女が子を成すようなことは……」

「何なら試してみたらどうだ、フィン。ずっと愛し合っていれば、その内天使と神の御子の間の子が出来るかも知れない」

「ふざけないで下さい！」

フィンは、手を伸ばして魔王の頬を叩きました。

その頬は赤く染まっています。

「本気だったんだがな……」

頬をさすりさすり、魔王はフィンには聞こえないように、ぼつりと呟きました。

それを聞きつけ、更にフィンはむくれてしまい、向こうを向いてしまいます。

「すまない。悪かった。機嫌を直せ、フィン」

魔王はフィンに向けテーブルに頭を擦り付けんばかりに謝罪しました。

最初から本気で怒ってなど居なかったフィン。
魔王が三度目に頭を下げるのを待って、許しの声をかけるのでした。

*

「あの“魔王の御子”のことだな」

夕食の間は、地上の出来事とは関係無い話をしていた魔王とフィン。
再び、地上の話題を魔王が切り出したのは、デザートの頃合いでした。

「ユキですか？」

「そうだ。宰相が、慌てて駆け込んで来ただろう？ 宰相は、ユキが地上に行くことに反対していた。私も反対していたがな」

「何故ですか？」

「人間に神の御子の子供を殺させたと話したな？ 彼は、その子供の側にいて、悪魔に取り憑かれ裏切った者の一人だよ。その後死を圖ったので哀れに思い、魔界に連れて来た。以来、今日まで良く働いてくれている」

「そうなんですか」

魔界で一番昔から住んでいると言われる人間。
その由来を聞いても、フィンにはピンと来ませんでした。
それよりも、気になることがあります。

「ユキは自分のことに気付いたのでしょうか？」

「気付いただろうな。あの子は知恵深い娘だ」

「彼女はこれから…」

「神の御子は自分の正体を知って、何か変わったか？」

「いいえ、何も」

「それが、答えだよ。恐らくな」

そう答えた魔王。

フィンの次の質問が無いと知ると、二つ目のケーキに手を伸ばします。

すると侍女が入って来て、お客様が到着されましたと告げました。ああそう言えば、そんなことを言っていたとフィンは思い出します。

「私は、失礼した方が良いでしょうか」

「いや。君もいてくれ。と言うより、いてくれないと困る」

「はい」

*

王宮では無いので、一番広いこの部屋で客を迎えることになりました。

テーブルと共に片づけられていくデザートを魔王は名残惜しそうに見送ります。

やがて会見の間と同じように椅子が据えられ、魔王とフィンは次の間に下がりました。

「お客様とは一体？」

「来るべき戦いで、切り札となるべき者」

「切り札？」

ミストに匹敵する正統悪魔族の大物か、龍族の誰か。きつと、自分の配下につけられる者だろうとフィンは推測しました。

フィンが隣の間を覗き見ると、侍女の案内を受け入って来たのは一組の人間の姿をした男女でした。その顔にフィンは見覚えがありました。

「あの、まさか…」

「その、まさかだ」

「どうして」

「退屈だと言うので、遊園地の建設を任せていた。この二人をフィンに預ける」

小声で、魔王は言いました。

「預けるって」

「自由に使って良いということだ。来るべき戦いにおいてな」

「来るべき…戦い…」

「使い潰しても構わない。逆に、使わなくとも良い。もう、魔界での用事はあらかた済んでいるからね」

侍女が魔王様のお成りを告げ、魔王とフィンは急遽設えた会見の間に入り、椅子に腰掛けました。

「魔王様におかれ…」

「挨拶は良い。久しぶりの地上はどうだったか？ 娘には会えたのか？」

挨拶を制して、魔王は親しげに話しかけました。

「残念ながら」

「そうか。また、機会もあるだろう」
「ええ」

女の方が答えました。

「二人に紹介しよう。我がクイーンだ」
「お初にお目にかかります。クイーン」
「何時も娘がお世話になってます」

その二人をフィンは見た事がありました。
日下部匠ところん。

写真でしか見たことの無い、まるんの両親。

その二人が、今日の前に立ち頭を下げています。

フィンは二人にどう声をかけて良いか判らず、ただ立ちつくして
いました。

パート9（後書き）

これで最後になりましたね。

その後さくらちゃんにはさくらカードを全部そろえて悪魔と戦い、まろんちゃんハフィンちゃんを取り返して魔王と戦います。

あと少しで両親との再会がきますね。それにしてもミストやノインの言っていたクイーンとはフィンちゃんとは全然知りませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6641u/>

カードキャプターさくら番外編0 さくらとまろんの遊園地

2011年11月13日23時28分発行